

---

# 非日常は...、好きですか？

fem10(フェムト)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常は…、好きですか？

### 【Nコード】

N4720T

### 【作者名】

fem10（フェムト）

### 【あらすじ】

いつもの日常に飽きてしまった高校生。香川水穂が、ボンゴレフアミリー現ボス、沢田綱吉にぶつかってしまったことから始まる、非日常な物語。

のんびり更新になってしまっ…と思います！！お願い致します！！！！

## 第0章 プロローグ（前書き）

作者は二作目の初心者です…。

クソクソでダメダメな小説になるかも知れませんが、その時はどうかよろしく願います！！！！

## 第0章 プロローグ

いつもの日常には飽きた。

何に飽きたって？

そんなの全部に決まってるじゃん。

毎日高校に行って。

勉強して。

作り笑顔で友達と話して。

そんな日常に飽きたの。

たまには、非日常が欲しいよな。

ってか…たまにじゃなくて毎日がいい。

え？　どんなのが非日常かって？

うーん…そうだな。

例えば、あのイタリアの大マフィア<sup>たと</sup>。

ボンゴレファミリーのボスさんと友達にでもなったら…。

それは絶対に日常では無いかもな。

まあつまり、自分の望む非日常はそれっつーこと。

.....。

こんなこと考えてる時間があるなら、料理でもして早く寝よう。

あ...。

これこそまさに、日常に流される人間社会みたいだな。

そこで、自分も流されてるんだな。

まっ、いいか。

そうそうには 日常から抜け出せることなんか、無いんだろうし。

いいえ。

日常から抜け出すことなど、簡単ですよ？

ただし…。

本当に貴女<sup>あなた</sup>が？ソレ？を望むのならね？



## 第0章 プロローグ（後書き）

訳分かりませんね（笑）

次回から多分：最後の言葉が分かるようなものにしたいです（笑）  
では、よろしくお願い致しますノシ

## 第1章 日常の崩壊と非日常の構築

【水穂Side】

「ああ。やっと休日だ…」

水色のショートカットの髪を掻き、髪色と同じ色の目を擦る。

自分は、？香川水穂？と言う。

「今日は…何しようかな…？」

朝起きてから、必ず自分は呟くんだ。

そして、次に呟くのは高校三年生の自分にある1つの望み。

それは、

「今日も…非日常を探してみよう…」

それは、非日常になること。

今のの日常的な生活に対し不信感を抱いていた自分は、その？当たり前？と言うカラを突き破ることを試みていた。

「じゃあ今日は…うん。並森商店街に行こうかな」

このとき…どうしてココをチョイスしてしまったんだろう。

後悔は先に立たずだけだな。

「うーん…じゃあさつさと準備しないと…」

今思い返すと、このとき既に自分の望む？ソレ？は叶っていたのかも知れない。

〕・〕・〕・〕・〕

「…ってよく考えたらこんなところに非日常があるわけないじゃん」

並森商店街に着いた自分は、一人でツツコミをしていた。

「ここにボンゴレのボスでもないかな…っ…と…？」

とりあえず独り言を言いながら歩いていた自分は、ある者を見つけた。

一際目立つのは、サラサラしていてフワフワで、無重力ヘアの茶色の髪。

「……カッコ…いい…」

多分、見た者は誰でも言うだろう。

事実自分もいつの間にか口に出ていた。

「自分と同じくらい…かな？　でも…若干年上？」

ってか何でスーツ？

やっぱ大人なんかな？

「ああヤバイ…！　今日の夜ご飯用のおかず無かった…！」

大変大変…！

早く買いに行かないと…！

「スーパー…！　どっちだっけ…！」

よく方向音痴ほうおんちと言われる自分は、通い慣れた道で迷った。

ここでグルグル回ってしまったから…。

非日常が始まった。

…否。

始まってしまった。

こんなに望んだ非日常。

実際に始まるとよく分かる。

日常と言つ名の幸せが。

当たり前と言つ名の幸せが。

「あうゝ。目が回ってしまったあ…とつとつとつ…おおお！…！」

ズテン！…！

激しく転んだ。

これは痛いだろうな。

でも…。

「痛く…ない…？」

「そりゃそうだ」

「……………！！！！…？…！！？」

自分の下に…。

さっきの、男の人…！！？

「ははは…まさかいきなり押し倒されると思わなかったな…」

微妙な苦笑いで言うその人。

「ごっ…ごめんなさいっ…!!!!」

とっさに謝ったけど…。

だけど恥ずかしさは持続しますっ…!!!!

だって倒れた先にさっきの人って…。

どっかのメロドラマかよっ!!

「あ…あの…その…本当すみません…!!!!」

「だ、大丈夫大丈夫…；； そっちこそ、怪我は無い？」

「あ、ハイッ！ ホントごめんなさい…!!!!」

まさかこっちに対して心配してくるとは！

なんと言っ天然ジゴロっ。

「じゃあ…オレはこれで…っっ…!!」

「え！？」

浮かれてる場合じゃない！？

スーツの腕の部分から血が出てるじゃん!?

しかも…結構大量だよ!?

まじ大変だ!!

どうしよう!!??

【三人称Side】



「大丈夫ですか!？ 自分のせいでごめんなさい!?!」  
激しく謝る水穂。

「大丈夫大丈夫；； ちょっと擦りむいただけだから」  
そんな水穂に対し、微笑んで言う茶髪の者。

「違う!! 自分のせい!!」

「んなつ…」

「何か…お詫びをさせて下さい!! あと、ついでに家まで送ります!!」

「は…はあ…」

「だからあなたの名前をまず教えてくれっ!?!」

元々口調が悪い水穂。

だから、彼女は敬語など使わない。

つまり…。

(今なんか地が出た !!?)

とつさに地が出てしまうのです（笑）

「お前、名前なんて言うんだ!？」

「口調が…」

「あつ、なんて言うんですか!?!？」

（取り繕ってる　　!?!?）

水穂を見ていたその者は、黙って水穂を見つめていた。

そして、水穂は笑っていた。

こんな感じで…。

「はは…ははは…」

「……」

「ははは…」

「……」

「あは…はは…は…」

「早く言えやこのヤロ

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

[illegible]

さてさて、こんなに強引な彼女でさえも、大空は包容してしまうのでしょうか？

それはこれからの物語。

大空の包容力が勝るか。

それとも、誰にもとられない明るさを持った子が勝るか。

少なからずこの子の名前は、ボンゴレファミリーの歴史の1ページに刻まれるでしょう。

だって、彼女は

そういう運命さだめなのですから。

## 第1章 日常の崩壊と非日常の構築（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございますっっ!!!!

こんな感じで更新していきたいと思います！

ペル・アミーチ 仲間のために の合間を縫って書いていきますので…。

更新が遅れr（ゴホンゴホン

でっ、ではまた次回に〜ゞ（、、；；；）





「  
……  
」

「  
……  
」

「  
雨が…振つてきた…  
」

「  
あ？  
」

「  
あ…  
」

「  
あ？  
」





そんな男を見ていた水穂は、ふと自分の疑問を思い出した。

「あつ、そうだー!! だから、お前の名前ってなんなんだ?」

「え…。あ、うん。オレは…」

「オレは??」

「オレは、沢田綱吉って言うんだ」

「沢田…綱…吉…」

「うん! ツナって呼んでね!」

名前を再度確認する水穂に、笑いかけてもう一度自分の名前を言うツナ。

「ツナ…?」

「そう。ツナ!」

「へえー。じゃあよろしくツナ! 自分は香川水穂、よろしく」

「水穂ちゃん？ よろしく！」

水穂に握手を求めるツナ。

そして、それに応じようとした水穂だったが。

「痛っ！……！！？」

「えっっ！……！！？」

「……あはは……怪我のこと忘れてた……」

「そうだった！！ 大丈夫かツナ！？ 家はどこだ！？ 自分が送るからっっ！……！！」

「別に平気だよ。それにこれから、他のマフィアと会議だし。君と一緒に行くわけにはいかないしね」

「そうか……他のマフィアと会議か……なら仕方ないな……。 ってマフィアアアア！……！！！！？」

「え……？ はっ……！！ ……言っちゃったああああ……！！！！！！」

自分の望んだ非日常。

たとえばで、確かにマフィアと友達に……とは言ったけど……。

本当になっちゃうとは思わなかったよ      !!!?

だから言っただでしょ？

非日常から抜け出すなんて簡単なですよ。

さあ、これからは非日常のオンパレード。

これからの彼女の人生は、非日常の波が押し寄せて来てばかりになるでしょう。

それでも、彼女は非日常を望むことができるでしょうか？

それは、これからのお話です。

もしも、非日常を日常とできたなら…。

そのときの彼女は、一体どうなっているのやら。

神様のイタズラに、皆様には少しばかりのお付き合いを願います。

それでは…。



## 第2章 マフィアとの出会い（後書き）

少しずつ歯車が回り始めましたねw

これからはどうなってしまうのやら（笑）

色々とぶつとんだ設定になるかも知れませんが、  
その時はどうぞよろしく願います！

では、また次回に〜ノシ

### 第3章 メイドになることを求められた。

#### 【三人称Side】

「え…あ…マフィアって…あのマフィア…?」

「そ…そのマフィア……」

降りかかる雨は、次第に強くなっていく。



ちらほらとしか居なかった傘を差す者が、いつの間にか差していない者のほうが少ないくらいだ。

…と言うか、差していないのは水穂とツナだけ。

一応ツナは折りたたみを、水穂は手に持っていたものの、2人もそれどころではない。

一方は長年の夢が叶いそうで。

一方は色々とマズいことを言ってしまったからだ。

「マフィアって…そんなに軽々公言していいのか？」

「あはは…悪いと思う」

頭を掻きながら言うツナに、流石さすがに呆れた様子の水穂。

「よ…要するに、一般人に言ったらヤバいんだろ？」

「そゆこと…」

「だったらさ、自分がマフィアになればよくないか!？」

「んなつ!!? ダメだよ!! 水穂ちゃんには向いてないと思うし…第一、毎日が命の奪い合いなんだよ!? 君みたいな子を巻き込むわけにはいかないよ…」

慌ててツナが水穂の考えを否定する。

が、水穂はツナよりも上手<sup>うわて</sup>だった。

「でも、自分にマフィアって公言したことがバレたら、色々やばいんじゃないエか？」

「ギクツツツ!!」

「図星だよな。じゃあさ、自分がマフィアと関わりを持てばいいんだよなっ！ そしたら…うん……」

「…?」

あまりにも水穂が『マフィアと関わりを持つ』ということに執着しているため、ツナは不信感を抱いたため、質問してみた。

「あの子、水穂ちゃん？」

「ん？ なんだ？」

「もしかして、マフィアになりたいな。とか思ってたりする？」

「ゲッ…!! 何で分かったの…!!?」

「誰がどう見ても分かると思う…!?!」

ボソツと呟いたツナの声は、誰にも届かなかった。

よかったね。

ツナ。

「分かったんならもういいやつっ!! ツナ! 自分にマフィアと関わりを持たせて」

「…分かったよ…。仕方ないね。オレも沈黙オメルの掟タとか言いそうデヤバかったし…」

「やったあ!!」

「だけどさ」

喜ぶ水穂に対し、冷めたようすでツナが口を開いた。

「ん?」

「アジトには変態とか肉食動物とか爽やかとかタコとかその他諸々とか居るけど…」

(なんかツナの周りが黒い気がする

!!?)

？気？ではありません。

事実です。

ツナは水穂の目線など気にせず、話を進める。

「それでもいいならさ…、ボンゴレファミリー現ボス。沢田綱吉とその守護者達のメイドでもやってくれるかな？」

「え…？」

「嫌ならいいんだけどね。しかも住み込みだし…お給料はちゃんと渡すけどね…」

「え…」

「人手が足りなくなっちゃって…」

「え…え…？」

「いいかな？」

「い…」

「い？」

(やっぱりダメか…)

半ば諦めたツナ。

だったが…。

「いいに決まってるじゃん!!!!!!」

「まさかの!!!!!!?!!?」

鋭いツツコミが、並森町に木霊しました。

運命とは、不思議なものです。

決して関わらないハズだったのに、

おかしい形で交わってしまいました。

これも、神サマのイタズラでしょうか？

彼女の人生が、180°…変わります。

それを幸と取るか不幸ととるかは、彼女によって決まります。

さてさて…続きはどうなるのでしょうか？

それは、次の物語。

次には…どれだけ絡み、混ざり合うのでしょうか…

フフッ…。

それにしても 哀れな少女ですね。

日常と言つ名の幸せが分からないなんて。

カワイソウに 。



### 第3章 メイドになることを求められた。(後書き)

1日で二話投稿!?

しかもなんか駄作に磨きがかかっている!!?

な…なんかゴメンナサイ!!!

次回からは皆さんで…と思います。

それではノシ

第4章 若干黒いところを見た気がした。  
(前書き)

アレレエ？

ツナさんしか出てきてないよお??

b y体は子供で頭脳は大人な名探偵さん。

#### 第4章 若干黒いところを見た気がした。

【三人称Side】

「……ホントに、メイドを？」

「ホントに、メイドを」

即答する水穂。

自分が質問したのに、水穂の即答の様子にツナは驚いていた。

理由はただ1つ。

ツナにとって、

『メイドさんやってくれない?』

『うん! いいよ!』…と言う流れが理解しきれなかったからだ。

しかもいくら同い年くらいとは言えど、見ず知らずの男に言われた上での即答。

だから、ツナの脳内は…。

(わ…訳が分からない…)

こんな様子だ。

そんなツナには目もくれず、水穂は話を続ける。

「なあなあ、メイドって主にどんなことするんだ?」

「え…あつ、うん。そうだね…。炊事に洗濯に掃除に…後は、ご主人様達のお相手だね?」

え…？

ご主人サマの…？

お・あ・い・て…？

水穂の思考が停止する。

ようやく搾り出した声は…。

「ちよいちよい。最初の3つは分かる。最後の言葉はなんなんだよ

？」

だった。

そんな水穂の動揺を超直感で悟りながらも、ツナはあくまで冷静だった。

「大丈夫だよ。どうせお相手って言ったって変態南国果実だけだから。それぐらいならオレがぶつとばせ」……。注意できるからね」

（今絶対『ぶつとばせる』って言おうとした　　！！？）

「問題はもしも肉食動物が水穂ちゃんに好意を持った場合……。そのときは24時間体制で誰かしらつけないと……。いや、それでもダメだな。3秒で咬み殺される」

「か…咬み殺す…？」

そんなツナの独り言を聞いた水穂は、直感で悟った。

おかしい。

ボンゴレファミリーとは、絶対におかしい。

今スグに先ほどの言葉を撤回すべきだ。

小さい脳みそをフルに回転させた水穂の行動は、早かった。

だが…上には上がいる。

「あのさ、やっぱりメイドはk」「じゃあ行こうか」

「だから、やっぱりメイド」「じゃあ行こうか」

「だから…やっぱり」「じゃあ行こうか」

「だか」「行くよね」

「お願いします」

嗚呼<sup>ああ</sup>…日常が恋しい。

もう一度だけ…チャンスを下さい。

非日常を望んで…すみませんでした。

…もう遅いね。





#### 第4章 若干黒いところを見た気がした。(後書き)

前書きからしてすみませエエエエん!!!!!!!!!!!!!!

本文もすみませエエエエん!!!!

若干ペル・アミーチのネタ持つてきましたw

前書きの話。…と言うか言い訳。

でも…コナ 君ダイスキだし〜。

リボーンの次に続く ネ申 作品だし〜。

…

…

…ゴメンナサイ。

次回からは気合入れますです!!!!!!!!!!

では、おやすみなさい

## 第5章 アジトに到着した夢を見た。

### 【三人称Side】

「じゃあさ、アジトってどこにあるんだ？」

平々凡々。

そんな並森商店街に不似合いな発言が響く。  
その声の主は、<sup>めし</sup>高校生くらいの少女だ。

「アジトは、森の奥だよ。もちろん日本のね」

その声に応える声。

その主も、高校生くらいの者だった。

他と違うところと言えば、その独特な髪型と、美しい容姿だろうか。

「え？ そんなとこあったか？」

「うん。ボンゴレの勢力って凄いよ」

ハハハ…と笑う者      沢田綱吉。

ボンゴレファミリー現ボス。

そして、歴代最年少のボスにして、既に最強の名をほしいままにしていた。

ま、見た感じはヘタレっぽいけど（笑）

（ナルホド…感覚は普通の人なんだな…）

ツナの…なんと言うか、ほんわかさせる雰囲気、水穂もそう思った。

だからこそだ。

とりあえず訂正を入れることにしてみた。

「でもさ、作らせたのはツナなんだろう？」

「いや…代々継がれてるただの城だよ」

ん？

今、幻聴が聞こえた？

「今…『ただの城』って言った？」

「え…だって…城くらい普通でしょ？」

ザアアアア。

雨が一層強くなった気がしました。

…前言撤回。

やっぱりマフィアは普通感覚じゃなかった。

城って。

しかもただのって。

苦笑いをしながら思う水穂。

「え…じゃあ自分はそんなところでメイドさんするんだな…」

「うん、そーゆーことになるね？ 大丈夫！ 変態とかとはなるべく部屋を離すからね」

「ははは…そりゃあ安心だな…ははは…」

改めて、日常がどれだけ幸せか。

非日常の命掛けさが分かった気がした水穂だった。

そして、冷めた感情になると、忘れていたことも思い出したりする。

「そーだ…！ そう言<sup>い</sup>やあ会議はどうしたんだ…？」

「なっ…！！ 忘れてたっ…！！」

「ど…どーすんだ？」

「仕方ない…飛ぶか」

トブ？

とぶ？

飛ぶ？

飛ぶ！！！！？

「だっ…ダメだ！！！！」

全力で止める水穂。

「えっ…やっぱり…？」

そんな水穂を見たツナは、手袋装着をやめる。

「当たり前だろ！？ それにつ、こんな街中で飛んだりしたらっつ  
！！！」

「だけど…それだけ行かないとマズイ会議なんだよね…そしたら…  
仕方ない。独立暗殺部隊ヴァリアーのボスにでも頼んでみるか」

（ど…独立暗殺…！？）

出てくる単語一つ一つが、禍々しいモノ。

…と言つか、普通に言ったら電波ちゃん確定な単語だ。

たとえば『アジト』とか『飛ぶ』とか『暗殺』とか。

今の状況に思考が追いつかない中、水穂はふとツナの傷口をみた。

「　　っ！！！！」

雨にあたり、血が固まりにくい。

そのせいもあってか、スーツは血潮に濡れていた。

ツナの周りの水溜りは、赤い。

一体どれだけ深く切ったのだろうと思う水穂。

そして、次に思ったことは…。

(い…痛くねエのかよ…：：)

平気な顔をして、携帯電話のボタンを押すツナ。

マフィアだから、痛いのは慣れてるのか？

そういうものなんだろう。

と言うか、そう思わなかったら他にどんな理由がある。

「……あつ！　もしもしXANXUS？」

『…沢田綱吉か。なんだ』

「うん」。今ちよつと子猫拾っちゃったんだ。それでね、今すぐ  
アジトに戻らないと雨も降ってて可哀想でしょ？　だから、代わり  
に会議でてくれないかな？」

(こ…子猫お！！！？)

赤くなる水穂。

『……断る』

「…そつか、断るんだ。先月にヴァリアーが余計なモノ壊しちゃう  
から。オレのおこづかいから差し引いてべんしょーしたのにね。な  
のお詫びの気持ちとかないのか…」

(なんの会話してんの　　！！！！！？)



『…………分かった。オレが出てやる。場所はどこだ?』

「ホント? アリガトウ! 場所はね ……」

ツナの表情の変わりように顔を青くする水穂。

先ほどから赤くなったり青くなったり。

傍<sup>はた</sup>から見れば、具合でも悪いのかと思える。

…だが、間違ってはいなかった。

「よかった 変わってもらえたよ水穂ちゃん! じゃあ城に……  
って水穂ちゃん!!?」

「きゅー…」

雨に濡れたせいか、ふらつく水穂。

目をグルグル回している様子から、風邪でも引いたのだろう。

だが、問題はそこではない。

ついに倒れた先が…。

ドンッッッッ。

「水穂ちゃん!!!!!!!!!!?」

車道だった。

トラックにはねられ、道路が血に濡れた。

ツナは、焦りだしたがとりあえず、

「おいっ!! ボンゴレ救護班大至急並森商店街に来て!!!!」

携帯で命令をし、どんどん青くなっていく水穂を、只々心配そうに見ているだけだった。

さあさあ、非日常の幕開けだ。

どうしたの？

もっと笑えばいいじゃないか。

待ちに待った非日常だよ？

え？

こんなのは誰も頼んでいないって？

はははっ…随分と都合がいいね。

言った言葉は、取り返しがつかないんだよ。

まあ精々楽しめばいいさ。

自分の発言の軽さに…後悔することだね。



## 第5章 アジトに到着した夢を見た。（後書き）

水穂のこの事故は…あの性格だとメイドとか向いてなさそうなので…。

これでいっそ、きおくそーしつとかなってもらおうかな？  
と思いついてw

あと、ツナをたまに黒ツナさんにしようと思うのですが…。  
どうでしょう？

ここまで読んで下さりありがとうございました！！  
でわでわノシ

## 第6章 精神世界で振り返った。

### 【水穂Side】

夜。

すべてが闇に飲まれ、包まれる。

そんなとき、中学生の私は闇を疾走していた。

「たっ…助けっ…はあっ…はあっ…」

息を切らせ、助けを求める。

後ろからは男が追ってきていた。

ナイフを持ち、マスクをして、明らかに不審者の様子。

と言うか、アレが不審者じゃなかったら、世の中がどうかしてるわよっっ!!!?

心の中でツッコミはしてみるけど…。

精神しは裏腹に、体力は底をついてきた。

だんだんと足は上がらなくなる、ついには。

ガッツ。



「あっ……!!」  
躓つまづいてしまった。

後ろを振り返ると、男はもうすぐそこだった。

「っ……!!」

恐怖からぐっ、と目を瞑る。

すぐに来るであろう衝撃は、来なかった。

恐る恐る目を開けてみると、同い年くらいの1人の少年が居た。

「大丈夫か？」

額に炎を灯し、片手で男のナイフを押さえて言う？彼？。

闇に負けないほどの輝きを放った純粹な炎に、私は思わず見とれてしまった。

「あっ……。はい……。大丈夫……です。ありがとうございます……」

私は慌ててそう応えた。

なのに、いつまでたっても返事は無い。

私の拳動不審な対応に、動揺してしまったのか！？

「そう思い、顔を上げると？彼？は、

「そうか…ならよかった」

ほっ、ほっ、微笑んだ！！？

只でさえイケメンなのに！！

しかも今までクールだったしっ、ギャップって言うか…！！？

鼻からケチャップでたらどうしてくれるんだ！！？

（ 変態ですか水穂さん ）

私がよからぬことを考えていると、？彼？はゆっくりと男のほうを向き…。

「……………」

無言で睨んだ。

男は恐怖に怯える。

最初は、いくら強いといえ中学2年生くらいの男子。

そこまで分かりやすく怯える理由が分からなかった。

そして、その理由を考えている時、私も感じた。

空気がピリピリする。

寒気がする。

手から腕へ、だんだんと全身へ広がっていく震え。

これが、世に言う“殺気”と言うモノなのか？

目が霞む。

声が出ない。

怖い。

怖い。

怖い。

怖い…怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

私は頭を押さえて震えた。

だが、怖いもの見たさと言うか。

恐る恐る目を開き、男と？彼？を見た。

すると、男のほうは既に失神していた。

失神しても倒れないのは、？彼？が片手で男の手を握っているから。

片手で、大の大人の体重をラクラクと支えている。

「あ…っ。ひっ…あ、ぐ……」

私は知らない間に恐怖の声を出していた。

と言うか、多分助けを求めたかったけど、うまく呂律が回らないために出た声。

そんな私に気づいた？彼？は、慌てて殺気を止めてくれた。

「す…すまない。大丈夫か？」

「あ…は、い。だ…だいじょ…です…」

大丈夫じゃない。

震えが止まらない。

先ほどまで、恐ろしいほどの殺気を出していた？彼？に近づかれた時点で、私の恐怖はピークに達していた。

「…本当にすまなかった。アイツは、チンピラマフィアのボスでな。最近の少女誘拐事件の犯人もコイツで…失神させたが、念には念を。思っ…」

「へ…？」

じゃあこの人は…優しい人？

「立ち上がれるか？」

私が呆然としていると、グローブをつけた手を差し伸べながら言

ってくれた。

優しい手。

ゆっくりと手を取り、立ち上がろうとするも。

「…あ、アレ？」

まったく力が入らない。

コレは…もしかして…。

「……腰が抜けたか」

ため息を吐きながら言われた  
！！！！

なんか恥ずかしいっ！！

しかもなんかそっぽ向かれた！！？

「…家は近いか？」

なんか急に振り返って言った言葉がソレ？

「あ…うん、近いよ？ その坂を上がって2個目の角を右に曲がって、その後3つ目の信号を左に曲がって1Km進めば家だから…」

「…全然近くないか？」

「ん？ そう？ でも私、いつも休日には絶対に50Km走ってるか

ら…大した距離じゃないと思うんだけど…？」

それを一時間で走るの。

普通でしょ？

そう言ったら、またそっぽ向かれた。

………何故？

理由は明確です。

「立ち上がれそう…にもないよな？」

「へ？ うん…そうだね。立ち上がれるようになったら、テキトーに帰るよ！ 助けてくれてありがとね！ だから、もう帰りな？ そっちも忙しいでしょ？」

「と言うか、家族は心配しないのか？」

「ああ…家族？ そんなのとっくに星になっちゃったよ」

空を見上げて言う。

でも、決して一番星は見ない。

あの人達が、そんなに輝いてるとは思えないから。

だから、私は大して輝いていない、そもそも今存在しているのか分からないような小さな星を見る。

すると？彼？はマズイことを言ってしまった、というような顔をしていた。

「だいじょーぶだよ　私、悲しくなんかないしね…。泣いたって意味無いし。泣いたから、またあの日に帰れるわけじゃないから。だから、私は泣かないからだいじょーぶ」

「……………」

今思い返すと、君は気づいていたのかもしれない。

私の言っていることの“ウラ”に。

泣いたから、またあの日に帰れるわけじゃない。

つまり…泣いてあの日に帰れるなら、今すぐ泣いている、ということ…。

「…オレが送ってやる」

「えっ？」

「ホラ、背負ってやるから。家まで案内しろ」

「えっ？　えっ？」

突然の状況でパニックの私。

もう恥ずかしくてっ！





「……んっ？」

気がつくと、私はベッドの上に居た。

「ハッ！！ イケメンは！？」

辺りを見回しても、どこにも居なかった。

すると、ベッドの枕の脇に置手紙があった。

内容はこうだ。

「とりあえず、家まで送った。」

だが、不法侵入罪で捕まりたくない。

ちなみに泥棒とかはしていないからな。

まあ気になるなら調べといたほうがいいと思う。

…ドアに鍵をかけていない時点で、気にしないとは思っがな。

いつかまた会った時、よろしくな。

オレの名前は、とある事情で言えないから。

裏社会じゃ、言っちゃいけないんだ。

次に会った時、全部言う。

だから、今は偽名で許してくれ。

オレの名前はTONNO。

次に会った時に言ってくれたら、俺はすぐに気づくから。

じゃあな。

P.S.

鍵はちゃんと閉めておけよな』

「ト…ンノ？」

不思議な偽名だな？

何かの言葉かな？

「鍵……分かりました。ちゃんと閉めます」

ガチャリ。

家に鍵をかける。

その瞬間。

私は今までの自分に、自分で鍵をかけた。

「分かった、TONNO。自分は…日常から抜け出すことにするよ」

君は、普通の生活をしていたんじゃない。

…そう。

非日常の生活、裏の世界に行かないと…。

「次に自分に会ったときには、よろしく頼むな」

アレ？

どうして自分は、自分を見ているの？

ああ、そうか。

自分はそう死んじやいそうなんだ。

死ぬとき、人は自分の人生を振り返るって言うもんね。

あれ…あっちが、光ってる。

行ってみよう…かな？

ダメ…だ…。

えっ…？誰の…声…？

そっちは…ダメだ…。

暖かい…。大空みたいに…包んでくれる…。

そっちは…ダメだ…！

あれは…なに？炎…？







## 第6章 精神世界で振り返った。(後書き)

ああ…眠い。

渚の指も限界突破——!!??

と、言うことで…。

ごめんなさいい…。

(なにが?)

ではチャオチャオ(ハロハ)ノシ

**第7章 これが多分本当の非日常の始まりだと思う。(前書き)**

題名とおりですね！

これが、本当の始まりです！

第7章 これが多分本当の非日常の始まりだと思う。

【水穂Side】

廻った世界。

周りを見ているだけで酔いそうだ。

黒の世界が廻っている。

気分が悪い。

水穂ちゃん…。

…誰だ？

名前を呼ぶのは…。

水穂…ちゃん。

聞いた事のある名前…だけど…誰の名前か思い出せない。

…そもそも…自分はダレだ？

………思い出せない。

記憶に墨がかかっているみたいだ。

ん？

今気づいたが、自分の着ているこの真っ黒いワンピース…。

まるで地獄で着そうなワンピースだな。

白かったら天国で着そうだけど。

ああそうか。

世界が廻ったのは、自分が地獄へ堕ちたからだろう。

ホラ、言っじゃないか。

死ぬときは記憶を失うって。

…でも、だったら。

さっきから聞こえるこの声はなんなんだ？

戻ってきて…。

モドッテキテ？

自分が…か？

戻ってって言われても…；；

どこにだよ…。

この沢田綱吉の…メイドさんになってくれるんでしょ…。

はあ！？

ダレだよ、沢田綱吉って！？

しかも素晴らしく徳川家五代目将軍と名前が一致してるし…！？

だから…早く…。

ポツッ、ポツッ。

…ん？

雨…なのか？

アレ？

でも…随分と暖かい雨だな？

早…く…起きて……死なない…で…？

雨が強くなってきた。

そもそも、これは…雨？

違う。

これは 涙？

お願い…お願いだよ…。

涙というキレイな雨の当たった場所が、黒から白になっていく。

気づくと、自分のワンピースも白くなっていた。

心地がいい。

ふと下を見ると、自分の下には大空が広がっていた。

下に大空があるのは、ヘンな気分だ。

そして、その大空の天気は…なんと言うか、丸く円が変わっていた。

要するに…自分の周りの天候が、嵐や雨や、雲に晴に雷…霧なんてのもあって…。

その中心の大空に、自分が立っている…と言つか浮いている感じ。

早く…戻ってくるんだ。

その言葉と同時に、自分の上が光った。  
なんとなく理解<sup>わ</sup>かった。

あそこに行けば、？戻れる？と。

早く…早く…。

分かった。

分かりましたよ。

今から行きます。

光に向かつて、空を泳ぐように近づいていくと、握り拳くらいの光の玉があつた。

おそらくこれが光源。

でも、眩しくなかつた。

恐る恐る？それ？にふれると…。

また、世界が廻つた。



【三人称Side】

「水穂ちゃん…起きて…」

個室のベッドの脇に座り、只ひたすら祈るのは、沢田綱吉。

「水穂ちゃん…」

ピクッ。

「!!!!!!?」

指先が 動いた!?

「水穂ちゃん!! 水穂ちゃん!!? みんな!! 来て!! 水穂ちゃんが!!!!」

「どうしましたか10代目!？」

真っ先にドアを開けたのは、銀髪の男 獄寺隼人。

「水穂がどーした!？」

「極限に無事かあああ!!!?」

続いて入り口から顔を覗かせるのは、黒髪で人のよさそうな男  
山本武。

それと、いかにも“ボクシングやってます”と言う感じの男  
笹川了平。

「ボス…どーしたのです?」

「クフフ…久々に聞きましたよ。沢田綱吉…あなたのそんな嬉しそうな声」

9歳くらいの子供      ランボ。

それに、独特な髪型でクールな言葉を使う      六道骸。

室内に入ってきた守護者に、ツナは今の状況を伝えようとする。

…が、1つ違和感に気づく。

「みんなあ…。って…。あれ?      雲雀さんは?」

「僕ならここに居るよ」

「んなあ!!!?」

いつの間にも後ろに居たのやら。

黒髪の男　雲雀恭弥。

大して水穂に興味も無い様子で呟いた彼に、叫び声をあげるツナ。

…と言つか、ビビっているのだが……。

そんな賑やかな様子の中、静かに起き上がった。

水色でショートカットの髪をしなやかに揺らし、華奢な身体を折り曲げる。

そして、澄んだ水色の瞳を開いた。

「…水穂……」

感極まった声で、呟くツナ。

希望が見えた。

光が見えた。

……誰もがそう思った。

でも…違った。

希望の光からは、闇も生まれた。

「どうしたの？　水穂ちゃん？」

「……」

黙りこむ？彼女？。

そして、呟いた言葉は…悲しいモノだった。

「水穂とは……誰のことですか？」

空気が……。

「……！！！！？」

凍  
っ  
た。

第7章 これが多分本当の非日常の始まりだと思っ。(後書き)

あう。

指が… 大気圏突破しましたw

渚の指が死にそうですw

ああもうわけがわからないや

とりあえず言えること。

ね… 眠い!!!!!!!!!!!!!!

と、言うことで…。

おやすみなさい(´・`・´)(ノシ



## 第8章 記憶が無い。

### 【三人称Side】

「誰のことですか？」

小さな小部屋に再度響く声。

目の輝きは絶え、希望の無い声だ。

「え……水穂……ちゃん……？」

信じられない。

目覚めたと思って喜んだものの……記憶喪失だと……？

ツナもしかり、守護者全員が今の状況をつまく把握できなかった。

すると、水穂が口を開いた。

「水穂とは……自分のことでしょうか？」

輝きの無い瞳で、ツナを見つめて言う。

「あ……う……え……」

「そうだよ」

「……！ 雲雀さん……」

拳動不審なツナを見た雲雀が変わりに応える。

ゆっくりと水穂の視線が、雲雀へと移り変わった。

「ですが……水穂と言う名に聞き覚えがありません……。それに、先ほどから後頭部が痛みます。これは……自分が記憶喪失と言うことなのでしょううか？」

「なっ……」

冷静に雲雀に問う水穂。

そんな水穂を見て驚くツナ。

ツナの反応は、当たり前と言っていていいだろう。

自分が記憶喪失だと知って、これほどまでに冷静な者はいるだろうか。

そもそも、これほど簡単に分析をする彼女も凄い。

「とすると……貴方達はどなたですか？ 自分はこんな逆ハーレムな人生を、今まで送っていたのでしょうか？」

「はあ……!!?」

次に水穂の言葉に反応したのは獄寺だった。

でもまあ、これも仕方ないかも知れない。

目覚めたら自分を取り囲むように男が7人も立っている。

この状況に赤くなったりとしても青くなったりとしても、そう考えるのは間違っていない。

「ところで、自分はどうしてここに居るのですか？ 知り合い……お友達だったのですか？ それとも、ここが自分の家だったのですか

「？」

どんどん出てくる彼女の疑問。

それについて冷静答えたのは

「違うよ」

雲雀だった。

「ここは君の家でもない。ここに君が居るのは、そこにいる草食動物が君を拾ってきたから。つまり彼以外の僕等は、君のことをまったく知らない。他の君の推測は、大分あっているけどね」

メモでも取っていたのだろうか。

あれだけの質問に、1つ残らず答えを返す。

頭のできが違つや…と思うツナ。

爽やかにスゲーのな、と思う山本。

でしゃばってんじゃないよ、と思う獄寺。

反応はどうであれ皆は2人の会話に、開いた口がふさがらなかった。

「なるほど、では自分は…目の前にいる茶髪の人に拾われた…。記憶の無い捨て猫なんですね」

（え？ そんな解釈でいいの！？）

なんとも図太い神経だ。

そう思ったツナであった。

「では、自分はどうすればいいのでしょうか？ 行く当ても無いところを拾われた捨て猫の自分は、ご主人様に尽くします……が、自分はどうすれば？」

「ちよっ…ちよっと待って！？ どうしてオレのほうを向いて言うの！？ って言うか、どうしてオレがボスって分かったの！？ 今までの会話じゃあ、雲雀さんだっと思って思っても不思議は無いのに……！」

ツナが慌てて言う。

水穂の勘と言うか…、天才的洞察力が恐ろしく思えたのだ。

「え…どうしてでしょう…？ そうですね…。例えるなら…猫の勘…ですかね？」

「…／／／／」

初めて笑った…と言うか微笑んだ水穂に、赤くなる守護者。

まあ了平は「極限だー！！」と叫び、雲雀はどこかに行ってしまう、赤くはなっていないが…。

「さあどうすればいいですか？ 自分はここにいることを望みます…ですが、ボスの貴方の意思が一番重要ですから」

ツナに迫る水穂。

NOと言えない状況のツナ。

まあ断る理由も無いし、そもそもメイドをしてもらったために連れてきたのだから。

「じゃあ…香川水穂ちゃん。ここで働くことを…君に命じようかな？」

「よろこんで！」

またもや微笑む水穂。

すると…ツナの後ろの人影に、目線が行く。

「あれは…どうして、パイナップルの髪型をしているのでしょうか？」

「クハアアツツ!!!?」

ダメージを受ける骸。

まあ真顔で言われたのだ、無理は無いだろう。

すると、ツナが水穂に注意をした。

「だめだよ水穂ちゃん、違うよ。アレは…」

「そうですよ沢田綱吉。はやく訂正を入れてくだs」

「アレは？パイナップル？じゃない…？パイナップ…だよ」

「ああ、なるほど」

「違うでしょ！？ 僕はパイナップーじゃありませんよ！？ 香川水穂！ 君も何納得してるんですか！？」

「あくまで沢田綱吉様の意見が第一です。それに…」

「それに…なんですか？」

「なんかあなた…イジめると面白そうだから…w」

（悪魔だ

!!!!!!!!!!!!!!）



彼女は どうして 沢山 の人が居るのに 冷静 だったのか。

それは…。

全員、イジめると面白そうな感じがしたから。

だ、  
そうです。

## 第8章 記憶が無い。(後書き)

水穂ちゃん悪魔ですねw

でも若干私に似てる気がする(ゴホンゴホン

あ、いえ…なんでも(笑)

ところで…。

次回に水穂cのプロフィール書こうと思うのですが…。

どーでしょうか(´・`・´)

え？何でこのタイミングかって？

そ…そりゃあ、ネタが切れてきたわけじゃないけど…。

ちよいとアイデアが浮かばないから…；；；

あ、そーゆーのがネタ切れっていうんですよね(笑)

ということ…。

今回はプロフでかんにんしてください…!!

でもネタが浮かんだらちゃんと本編ですw

こんなダメ作者でごめんなさい!!

では次回に(´・`・´)ノシ

## 紹介編 プロフィール。

名前

かがわみずほ  
香川水穂

誕生日

2月14日 水瓶座

身長

正確には本人も知らないらしいけど、多分157cm位。  
中学生のときのツナと同じくらいですね。

## 体重

誰が言うかバカ。

とのことですよ。

でもとっても軽いんです。

## 髪の色、長さ

水色のショートカットです。

色は、言うならばハヤのごとくのハテくらいですね。

長さは、肩につくくらいの長さです。

(本気で怒ったときのみ、真っ白になります)

## 目の色

髪の色とまったく同じです。

目はとっても大きいんです。

だけど、どこか強そうな雰囲気目の目です。

(髪と同様、本気で怒ったときのみ、真っ白になります)

## 好き／得意

食べ物で言えば甘いモノなどです。

人間の性格なら、常識人、強い人、優しい人、爽やかな人、  
e t c  
…。

あと、ツンデレとかも可愛いなって思います。  
基本的にはみんな好きです。

スポーツは、素晴らしいです。

中学校1年生のとき5階から飛び降りて、無傷でした。（化け物  
かつ！？

### 嫌い／苦手

食べ物ではありません。

人間の性格なら、ウザい奴、変態な奴、e t c…。

まあとにかく普通じゃないやつは嫌いらしいです。

スポーツで1つだけダメなものがあります。

水の中に押し込まれると、髪の色が真っ白になります。

でも抵抗できないため、別に怖くないです。

### 武器

そのへんにあるものなら、すべて武器にしてしまいます。

ボールペンだろうとボタンだろうと、色々と持ち出します。

でも基本的には、常に所持しているリボンです。

相手の首を締め上げたりして闘います。

怖いです。

…  
終了  
…

## 紹介編 プロフィール。(後書き)

こんな感じです。

今思いました……

水穂ってもしかしてヘンな人!?

あれれ……でも渚に似てるって……。

もしかして渚もヘンな人!? ( ) ガーン

……ま、いつか

では……おやすみなさいませ〜ノシ



## 第9章 やっぱり変態ってどこにでもあると思った。

### 【三人称Side】

「ところで、メイド…さんをするのですよね？ 具体的にはどんな仕事を？」

（やっぱり、記憶が無くなっても思っていることは変わらないのかな？）

水穂の言葉を聴き、こんなことを思うツナ。

すると、しばらくフリーズしたツナに、水穂が声をかけた。

「……………綱吉様？」

「……………」

「……………綱吉様っっ！！」

「へっ？ ああゴメン！ え〜っと…………炊事洗濯掃除と…………あと、ご主人様のお相手」

言いかけたツナの視界に？ソレ？が入った。

ニヤリと笑う南国果实。

「…………骸。何考えてる」

「クフフ…………」

「何考えてる」

「クフフフフ…………」

「何・考・え・て・い・る・の・か・な」

「クフフフフフフ…………」

バカにしているのかこの者は。

心で思つ水穂。

何を聞こうと『クフフ』としか言わない。

しかも素晴らしく透る声だ。

余計にイライラする。

「…骸、怒るぞ」

（既に怒ってるじゃん）

琥珀色の大きな瞳で骸を睨むツナ。

ごもつともなツツコミを心の中でする水穂。

「クフフフフ…」

（ワオ。度胸のある人だ）

せつかくの綺麗な瞳を閉じて、ツナから視線を逸らす骸。

すると、諦めたのか呆れたのか、ツナが頭を掻きながら言った。

「あー…もーいいや。水穂ちゃんは好きにすればいいよ」

「えゝ！！！！？」

何を言い出すんですかこのサイヤ人はっっ！！？

もしかして黒いのですか!!? ?

黒いんですね!!? ?

「ただし……」

「クフ？」

（ク…クフ…! ?）

（なんか既に『クフフ』が言語になってるし!!? ?）

さすがのツナでさえもツツコミを忘れるナチュラルなボケ。

だが、ここで引くツナではない。

気を取り直し、ハッキリと言う。

「ただし…」

「ただし？」

「骸が毎日パイナップルの缶詰を食べると誓ってくれるならね」

「あゝっっっっ！……！……！……！」

満面の笑みで言うツナ。

やっぱり腹黒いのかと思う水穂。

（と言うか、そんなにパイナップル…間違えた、パイナップルと言われるのがいやなのかしら？）

付け足して考えるが、まあイジリがあるからいいかと自己完結する。

「どーするの骸？」

「…まあいいでしょう。僕もそこまでしてネコを飼いたいわけでもないですしね」

「あっそー。ならよかった　じゃあ水穂ちゃん、お仕事は炊事に洗濯に掃除に…ご主人様のお相手だから、そのつもりでよろしく」

（……………ん？　今、何かしら幻聴が聞こえた気がしましたが綱吉様？）

「…ちよつといいですか綱吉様。ご主人様のお相手…、ですか？」

「うん。ご主人様のお相手」

ちよいとまでちよいとまでちよいとまで。

「綱吉様。頭は…無事でしょうか？」

何気に酷いこと言うなこの子。

心で思っけど、その発言も仕方が無い気がしたツナはそこで片付けることにした。

「あ…はは。まあそう思うよね…大丈夫、お相手って言っても肉食動物さんとそこにいる人だけだと思っから」

「ふうん…。そうなんですか……」

「…なんだか残念そうな顔していますね。そんなに僕のお相手が嫌ですか？」

「ええとつても」

(酷エ

!!!!!!?)

満面の笑みで骸に返す水穂を見た守護者の心は、1つになっていた。

「……………では先ほどの雲雀恭弥はどうなるのですか？」

「ん？　そうですね…。ルックスは貴方達は素晴らしいです、普通の人ならイチコロかも知れませんが、自分は違うので」

「？」

「既に好きな人が居る自分には…少々お相手はできかねます…」

え？

今なんて言った？

全員が心で思う。

それを口に出したのは……。

「それって…誰のことだよ」

獄寺だった。

水穂の視線が、今度は獄寺に移る。

「誰とは言えませんが…おかしいですか？」



「つたりめーだろ!!! 記憶喪失でたった今目覚めた奴に好きな人が居る!? ありえねェだろ」

「違います」

「えっ？」

間の抜けた獄寺の声。

水穂の言葉に次に質問をしたのは、ツナだった。

「それって…どーゆうこと？」

「あ…、はい。なんだか記憶が少しだけ残ってるんです。夜の道で助けてくれたヒーローさんの記憶です」

ハッキリとした言葉で言う水穂。

「前に夜道で転んで…それで助けてもらっただけです。だけど…その人の顔は愚か、自分の口調さえ覚えてませんけど」

ん？

よ・み・ち？

ツナはたじろぐ。

「へえ…；； じゃあ好きな人って…」

「その人です！ 愛の力って凄いですね！ 記憶喪失になっても好きな人のことは忘れませんでした」

（なんか…そんなことがあったような気も……）

若干思い当たることがあるような気が…？

でも…アレって夢だったよな。

うん、夢だったはずだ。

あつ。

水穂ちゃん、凄い笑ってるな。

こうやって見れば、彼女は嬉しいときにしか、本当の笑顔を見せないよな…。

わざと？

それとも、こうとしかできないから？

どちらにせよ、彼女は普通の子ではないのかな。

傷があるのかもしれない。

何か悲しい過去があるのかもしれない。

だったら…。

「……水穂ちゃん」

「なんですか？」

「その夜道の人ってね、オレなんだよ？」

「は？」「」「」「」

記憶の中で、自分が動いた気がしました。

やっぱり、こっちは普通じゃねえな。

って……。

綱吉様を信頼するのは、自分には少し難しいようです。

第9章 やっぱり変態ってどこにでもいると思った。(後書き)

ツナが既に黒い!?

と言っか、水穂ちゃんツナが若干苦手なのでしょうか?

うゝん…。

ま、いーや

どーにでもなれ

結局是水穂ちゃん誰かしらとくつつくのですが…。

誰がいいですかね?

でも誰ともくつつかないかも知れませんwゞ(・・)ノワイイ

まあどーにでもなれ精神でいきますねw

リクエストがあればお知らせしてください!

できる限り渚も努力しますので…;;;

ではおやすみなさい!

P S

テストのため、1、2週刊は更新が遅れるかもしれません。  
身勝手の渚をどうかお許しください、ゝ。

第10章 守護者さんたちはよく見ればいい人のようです。

【ツナSide】

「覚えてるかな水穂ちゃん？」

笑顔で言うオレ。

笑顔が消える水穂ちゃん。

「え……；； あ、あの……。綱吉様、頭は大丈夫でしょうか？」

（1日で2度も頭心配された　　！！！！？）

「10代目。あのですね、冗談でも言っていていいことと悪いことがあるんですよ」

（部下に怒られた　　！！！！？）

何気にショックを受けたよ……。

が、まあ仕方ないとするか。

だって普通に考えたら、君の思い人はオレなんだよ？

って言い出した奴は、確実に電波だ。

イタイ人だなよなあ……。よく考えたら。

するとふいに殺気を感じた。

振り向いて背後を見ると……。

「……………沢田綱吉。咬み殺していい？」

「んなっ！？　いつまのに雲雀さんっつ！！！！？」

「やっちゃって下さい雲雀様。あ、間違えた。遣っちゃってください  
い」



「水穂ちゃん！？ 漢字を間違えてるよっ！！？」

腹黒い。

この2人は腹黒い。

何よりもこの水穂ちゃんだ。

ネコって家に懐くらしい。

主人には懐かない。

なんだかオレが？主人？で、守護者が？家？って感じ。

まあ…いい気分はしないよな…；

「分かった分かった、ごめんなさい水穂ちゃん。オレの勘違いでしたね。ごめんなさいごめんなさい」

「棒読みですよ綱吉様。ってかマグロ」

「ちょっと！？ 一応オレが主人だよ！？」

「ああ忘れてました。申し訳ございません。ところで…先ほどの話は本当でしょうか？」

「へ？ あ…っ…」

どうしよう。

まあ確かにオレの記憶も危うい。

あの独特な色の髪色の子が水穂ちゃんとは限らないし…。

（今気づきました…。早口言葉みたいですね、この文章w）

そもそも…夢だったかもしれないし…。

嗚呼。自分の軽率差にほとほと呆れるよ。

ダメツナからは脱出できたと思ったんだけど…。

あー、ダメツナって言えば…オレがマフィアのボスになるって決意したのって…。

並森中学校卒業の日に…京子ちゃんに振られたからだよな。

振られたからだよな。

振られたから。

振られた。

振られ…た…。

プチンッッ。

【三人称Side】

「あら…なんですか？　今の何かがキレたような音は？」

軽快な何かが切れる音に、疑問符が浮かぶ水穂。

音の根源がツナだと分かり、そのままツナにふれようとするが。

「香川水穂。君…危ないよ」

その手を雲雀に遮られ、ベッドに手を強制的に戻される。

「えっ？」

「久々に見たな…。10代目の？アレ？」

（アレとは何かしら？？）

次々に呟く守護者。

そして、続々と戦闘体制に入る。

「香川……早く逃げるのな。今のツナに捕まったら……色々とまずいことになるぜ！」

「にゃっつ！……！」

叫んだ山本が、水穂を抱えてベッドから引きずり出す。

水穂も抵抗はするものの、軽々と山本に抱えられるなり部屋から連れ出される。

そして、

バタンツツツ……！！！！！！

素晴らしい連携プレーで、水穂は部屋から閉め出された。

「…………あの…皆様…自分は一応病人…と言うか、記憶喪失人なんですけど」

ドアに向かって語りかけるも、

シーン。

まあ当然返事が返ってくるわけないか。

とりあえず自己完結する水穂。

床にペタリと座り込み、ドアを見つめる。

中に入りたいわけがない。

入ったりしたら、自分がどーなるか分かるか。

先ほどからドア越しに聞こえてくる声が、？ソレ？を物語っていた。

『…………あ……。で、どーしたんだよさっきの女』

（女つつ！！！！？）

『きつ…気のせいじゃないですか？ここに女がいるわけないですよっ…』

『…獄寺。オレにウソつくのかよ。どーなるか分かってんだろっ？？』

(…えっ!!? あの人…本当に綱吉様!?)

「アレも沢田綱吉だよ」

「きゃっ。雲雀様…」

「僕の名前は雲雀恭弥。恭弥って呼んでよ」

「へ? でも…いちおう、ご主人様の次に上ですし…そんな気安く名前なんて…」

「いいから。僕の命令が聞けないの? それに、草食動物よりも僕が下って」

(…アラ? 今草食動物って言ったかしら?)

「……聞いてる? 僕の話」

「あっ…ごめんなさい。ところで今…草食動物と申されました…よね? そしたら貴方はさしずめ…肉食動物とでもおっしゃるのでしょうか?」

「……だったら何?」

その瞬間、自分の脳裏に言葉がよぎった。

『お相手って言っても、肉食動物とそこにいる人だけだから』

肉食動物って…。

冷や汗が滲む水穂。

最初はクールでカッコいい人だと思ったけど…もしかしてこの人のこと　…！？

だけど今更もう遅いのだ。

逃げ切る自信が無い。

と言うか…気になることもあるし。

仕方がない。

それだけ聞いて逃げようかな。

「では…恭弥。アレが綱吉様とは本当のことなの？」

「うん。沢田綱吉には人格が2つあってね、過去に振られたことを思い出したり言ったりすると、人格が入れ替わるわけ」



「え……；；　じゃあ今の綱吉様は……？」

「趣味は部下いびりでドS。性格は腹黒……つまり最低最悪で、そしていろんな意味で最強……って獄寺隼人は言っているよ」

「せつ……性格悪っつ！……！」

「そして、獄寺隼人は今の草食動物に名前をつけた」

「どんなですか……？」

「うん。黒い綱吉……」

通称、黒ツナだよ」

やっぱり……綱吉様は苦手な気がしました。

第10章 守護者さんたちはよく見ればいい人のようです。(後書き)

眠いです。

寝ますです…。

ララちゃんママが怖くて怖くて…；；；  
名 をなくした女神ですねw

ここまで読んで下さり、ありがとうございました!!  
では…おやすみなさい！

第11章 運命とは不思議なものだ。

【三人称Side】

「黒…ツナ…？」

汗が滲む。

一筋の汗は頬を伝い、そのまま冷たく跡を残す。

冷や汗を掻くのは　水穂。

「うん、黒ツナ。まあ確かに今の草食動物はそれでもいいかも知れないけどね」

「それってさ…今自分が知っている綱吉様は…白としか言い様がない感じだったけど…」

「だからなに？」

（おいおい冷たいな…）

心でツツコミながらも、話を続ける水穂。

「白の反対は黒でしょ？　もしかして…自分の知っている正反対の人…って考えていいってことかしら…？」

否定してくれ。

それだけを願う水穂。

だが…現実はそのほど甘くない。

雲雀が口を開く。

その口から出た言葉は　、

「そついうことだね」

(ガアアアン……)

「……っことは……女が大好きで、変態でスケベで腹黒くて……とにかく……大魔王……って……こと……？」

「……つまり……君、危ないよ？ 色々と」

「へ？」

雲雀が水穂の背後を指さす。

鉄製のドアが……オレンジ色になった。

溶ける……そして、熔ける。

ジュウウウウ……。

「ひっ……かつ、火事!？」

ドロリと溶け出す赤い鉄。

でも…火事で無いことは一目瞭然だった。

だって、一部しか溶けていないのだから。

すぐに考え始める……が、雲雀が水穂を引っ張ったため、その思考は遮られた。

「違うよ。こっちに来て」

走り出しながら、話を始める雲雀。

「今の沢田綱吉に捕まったら、君助からないから」

「はい！？ 何言ってるの！？ 助からないって…何をしてくるの綱吉様はっ！！？」

「……」

「無視ですかっ！！？」

手をグイグイ引っ張り、少しずつスピードを上げる。

「コイツの体力は底無しなのかしら？」

若干思っ水穂。

結構走ってもあんまり自分は疲れない。

前の自分は、スポーツでもやっていたのだろうか？

それにしても…この雲雀とやは本気を出したらどれだけのスピードで走れるのか。

水穂は呆れ顔で思う。

何気なく水穂は後ろを振り返る。

……と、？あの人？がいた。

「どこに行くのかな水穂ちゃん？」

（くっ…黒い！！？）

「綱吉様…」

「雲雀サンも、どこに行くんですか？ 水穂を連れて」

「どこでもいいでしょ」

「そーですか。じゃあ……」



スルリ。

「へっ……？ につ……に やああああ……！！……！！？」

「……！！……！！？」

「このネコは貰っていきますね雲雀サン」

走った。

2人の男女は逃げる。

悪者にさらわれし美しき女。

美女を救うため悪者を追いかけし勇者。

豪邸を曲がりくねり逃げる。

勇者は惑わされる。

悪者は、部屋に入った。

美女は……地獄を見る。

「  
って…勇者惑わされんなああ……!!」

「うるさいよ水穂ちゃん。諦めろよな」

「黙ってください変態っつ……!!」

「だいじょーぶ。ヘンなことしないし」

「したら絶対警察よんじゃるわっつ……!!……!!」

この美女は、恐れを知らないのか。

悪者      ツナは、そう思う。

「どーする気よバカ!!」

「どーもしないし」

「だったら出して!!」

「いいよ、ただし…オレの命令がきけたらね」

「なっ…何すれば逃がしてくれるわけ!!?」

「うん…、このマフィアのボスの…。オレ様のさ…メイドも含めて、部下になって」

廻る廻る。

運命の齒車。

廻り出したら止まらない。

絶対誰にも止められない。

壊れ出したら直せない。

絶対誰にも直せない  
…。

ダメ…ダメ…だ…。

自分の中で、誰かが叫んだ。





第11章 運命とは不思議なものだ。(後書き)

ホンマでつか!!?

ごめんなさい渚ですw

若干後輩に腐女子と勘違いされましたw

もう訂正できない…。

まさに零地点突破ですww

ではここまで読んで下さりありがとうございます！  
おやすみなさいませノノ

## 第12章 飢えた狼さん。

【水穂Side】

「部下…ですか？」

「そー！ 部下だよ」

「え…拒否権は？」

「無いね」

(だったら聞くなよ)

「ごもつともな意見を、あくまで心の中で言う自分。」

心の中だけの理由はただ1つ。

口に出したらどうなるか……

恭弥曰く、黒ツナとは脅威。

おそらくだが、自分にとっては天敵だ。

えっ？

白ツナはどうなるかって？

あつちは……よく話してないから分からないわ。

「んでね、部下ってのは具体的に言えば……オレの命令を聞くだけだから」

「素晴らしく大雑把じゃん」

「……んだよ？」

「なんでも」

オレの命令を聞くだけって…それ若干メイドと変わらないじゃん。  
ってかまったく同じじゃん。

「それが少し違うんだよね」

「サラッと読心術使わないで下さい」

「…確かにメイドと変わらないけど…君が1つだけ得をするんだよ」  
「…？ 何ですか？」

「オレの部下になれば…命を失うことはないね」

「……………は？」

「まあ正確に言えば、守護者になってももらえれば…の話だけど」

「……………え…いや…ちょいまって」

「守護者って言うか、まあオレの秘書でもいいんだけどね」

「いや…だから………」

「つまりは、オレの側近になればいいわけだ！ メイドだと離れる感じするだろ？ だから、オレの側近になるべきだと思うよ？」

「そーじゃなくて…」

「だから部下になれ」

自分の怒りが、ピークに達しました。

だつて意見を言わせてくれないんだもん。

「……う　おおおおおお　おお　おい……………」

「なんでS・スクアーロ!!!!!!?」

なんか自分の叫び声を聞いた綱吉様の顔が青ざめてました。

……どーしてでしょう？

【三人称Side】

水穂の太い声が、大豪邸に響く。

その声は、雲雀にも伝わった。

部屋の指紋認証ロックのかかったドアが開く。

2人の視線がそちらへ向く。

そこに居たのは。

「……ウルサイ……。沢田綱吉共々……咬み殺すから」

「どっ、どーしてよ恭弥!!?」

「雲雀サン……落ち着いて落ち着いて……」

「知らないよ。水穂、君も風紀を乱したのには変わりないし。沢田綱吉……君は前々から咬み殺したかったしね」

「あれっ？ オレの理由なんか酷くね？」

ソファ越しの会話。

パッと見れば、美男美女の会話…。

まあつまりは目の保養の様な光景なのだが…；；

実際に？そこ？に居たら、話は別だ。

行きかう殺気。

ここに一般<sup>カクキ</sup>人の者が居れば、既に気絶していただろう。

だが…一応は大マフィアの強さトップ2の2人だ。

気絶どころか怯える様子さえまったくない。

「……あの〜。お2人共…自分はどうしたら？」

「…水穂はどっかに行ってる」

「…水穂。その飢えた狼からは早く離れたほうがいいよ？」

「…水穂はカッコよさと可愛さどっちが好き？ オレならどっちでもやってあげるよ？」

（頭大丈夫なのかコヤツ等は？）

もう何だか狼が2匹居る気分。



はあ…とため息を吐く水穂。

だけど、仕方ない。

自分は飼いネコだから…。

ご主人サマには逆らえない…かつ。

うん、仕方ない仕方ない。

僅か0.5秒で片付ける水穂。

まあその間にも…。

「……………」

腹黒大魔王と肉食動物は火花を散らしていたのだが。

「雲雀サン。水穂のこと好きなんですか？」

「関係無いよ。君こそどうなんだい？」

「オレは雲雀サンに聞いてるんです」

「ウルサイ。僕の質問に答えなよ」

（じこちゅー共が……）

昔のツナのように、心の中でツッコミをする水穂。

絶対に関わりたくない。

心に決める……が。

火花は、周りに飛ぶものだ。

可哀想な子羊さんに、狼さんが迫ります。

「……そしたら……本人に選んでもらおうぜ？」

「いいね。後で嘆いても知らないよ？」

「……は？」

「……水穂」

「オレ様と」

「僕」

「どっちが水穂好み？」

自分の好み？

そんなのないよ。

だってついさっきからの記憶しか無いし。

でも…嫌いなタイプならありますよ。

腹黒かったり、常識がなかったり、ウザい人。

……どうしましょう？

ついてないですね、自分。

## 第12章 飢えた狼さん。(後書き)

ああ…

水穂ちゃんになりたい水穂ちゃんになりたい水穂ちゃんn(ry  
ツナと雲雀とかwうらやましいな(´・・・´)  
かつこいー!!

ではここまで読んでくださりありがとうございます

おやすみなさいませ

### 第13章 好みとか無いし。

#### 【三人称Side】

「えっ…えっ？ どっちが好みって…えっ？」

2人のイケメンに睨まれる水色の髪の者。

挙動不審な態度をとるが、決して嫌な顔はしないのが事実。

「でもさ…自分、好みとか無いし…ね？」

「じゃあどっちがマシなんだよ」

「まあ僕だろうけどね」

「黙ってください雲雀さん」

自分カヤの外じゃんっつ！！？

コイツ等は絶対に張り合うのが楽しいだけだ！！

正論を言う水穂。

だけど、彼等には水穂の心など関係ない。

「水穂…どっちが好み？」

（コイツ等　！！！！！！！！）

ダメだ。

ここはストレスが溜まる。

イライラした様子で、2人を睨む。

逃げてやるうか？

逃げてやろう。

おお丁度いい。

ここはたったの4階じゃないか。

ここからなら…逃げられる。

微笑む水穂。

そんな水穂に、答えを決めてくれたと勘違いした2人からは、油断が生まれた。

「どっちが好みなの？」

「って、」

「えっ？」



窓に向かい走り出す。

開いた窓に飛び込む水穂。

さすがの2人にも油断が生まれた。

まあ一般人が6階から飛び降りてまで脱走<sup>エスケープ</sup>するとは誰も思わないだろう。

なおかつ、彼女は記憶喪失なのだ。

「えっ、ちょっ…水穂っ！！？」

「待ちなよ。僕から逃げられると思ってるの？」

「いやいやいやいや、雲雀サン止める場所違くなっ！！？」

とりあえず…下に回って彼女をキャッチしなければ！

そう判断したツナは、慌ててドアから出て行った。

ちなみに、雲雀も慌てていたとか何とか。

【水穂Side】

風を切る。

落ちていく身体で感じるのは、冷たい風。

そして徐々に、重力を感じなくなる。

後ろ向きに飛び降りたから、落ちていく間に向きを変えなければ。

下を見ないで着地するのはあまりにもリスクだから。

「よいしょっ…とっ！」

空中で向きを反転して。

後は地面に足から上手く下りるだけ

…にしても、どこでこんな知識身につけたのかしら？

前の自分は何をしていたのやら。

ズキン。

「…つつ！!?」

頭が…痛い。

視界が霞む…。

アレ？

何…この景色…？

ザアアアア…。

森の中にある花畑。

木々が生い茂り、花々は輝くように咲いているわ。

…アレ？

花畑の中心に誰か居る…。

5歳くらいかしら？

水色の長い髪。

綺麗なシルクのドレス。

…………泣いている？

『グスッ…ひっ…うう…』

空中から見ている自分。

悲しい声が花畑に響く。

最初の心地いい風じゃない。

これは……

『ごめんねっ…木さんに…お花さん…』

これは、泣いている風…。

とってもとっても寂しい風。

『木々が…泣いてる…の…？』

『…！？ ……誰…？』

さっきの子が振り返った。

思ったよりも可愛い顔立ち。

大きくて丸い水色の瞳を潤めかせ、自分のほっを見つめた。

『！…！』

立ち上がったその子の周りが廻る。

グルグル廻る。

廻った世界は黒になる。

そして、ついにはその子も飲み込まれ

すべてが、闇になった。

「…ハッ……！！！！？」

何だったのかしら、今の幻覚！！？

目が見えたと思ったら…何気にピンチ！！？

地面がすぐ傍だよ！？

「んっ…大変っ！！ 氣道に乗っちゃってるから体制が立て直せな  
いっっ…」

ヤバッッ！！？

お尻から落ちちゃうわ！！？

もう…ダメだ！！！！

ぐっ、と目を瞑る。

すぐに来るだろうっ衝撃に耐えるため。

希望は無いけど、せめてもの頑張りと言っか。

来るぞ来るぞ…衝撃は今すぐに…。



……来ない？

すぐに…

衝撃が…

「えっ…？」

目を開けたら、綱吉様の顔がありました。

これはまさかの…。

「人を…キャッチ？ え…危険なの…に？」

あの瞬間に意識を失ったのは、

偶然か、

はたまた神サマのイタズラか。

この出来事が、彼女にとって幸せとなることを…

願うばかりです。

### 第13章 好みとか無いし。(後書き)

ここまで読んで下さりありがとうございます!!

ツっくんの出番少ない気がしました、(・・・)ノ

雲雀様はもっと少ない気がしました、(・・・)ノ

守護者は一番出番が少ない気がしました、(・・・)ノ

小説を書くのは…素晴らしくムツかしいですね(・・・・・)  
本当こんな駄作をよんでせ下さり、アリガトウございますっ!!  
では…おやすみなさいませ

## 第14章 何か不思議な能力が、自分にはあるようです。(前書き)

やっぱり若干チート入れたいです^^  
渚です！

水穂ちゃんに、不思議な能力追加しましたw  
くわしくは本編を見ていただければ幸いです！  
えっ？強制してるみたいですか？

HAHAHA

そんなわけがあるわけ……あります……

でもよんでほしいです……！

お願いします……！

では、本編です

第14章 何か不思議な能力が、自分にはあるようです。

【三人称Side】

「えっ……えっ？」

無言で水穂を抱えるツナ。

「えっ……えっ？ えっ……えっ？」

こんなにも水穂は動揺しているのに、ツナは本当に只々無言。





転がり落とされる水穂。

腕を押さえ、苦しむツナ。

フルフルと肩を震わせ、腕　二の腕を押さえる。

その目じりには若干涙が溜まっていた。

「うつ…うつあ…」

「綱吉様っ！！？」

今度は倒れこみ、茂みで震える。

先ほどの暴れようとは打って変わって、今度はマヒしているような震え方だ。

「どうなされましたか！？　綱吉様！！？」

「……あつ、…うつ、…で…」

ツナが何か言いたげに口を動かす。

「えっ…？　何ですか！？」

「腕が…、痛エ…」

「腕ですかっ！！？」

慌ててツナのスーツを捲まくり上げる。

乱暴なのは、気にしてはいけません。

そして優しくツナの腕に触れる。

「えっ！？ どこでこんな怪我してんですか！？」

水穂の視界に入ったのは、大きな切り傷。

どこでって言われてもなあ。

どこでも何も…、水穂のせいだし。

そうツナは思う。

「…………… さあ…？ 多分誰かに押し倒されて切ったんじゃないか？」

「へっ？」

「あ…いや、何でもねエ」

「それより…。なんか紫色になってますよ？」

「え？ うわっ…痛そ…」

「はっ？ 綱吉様の体のことなんですけど」

（なんかイキナリ冷たくなったな）

無事と分かったからもういや。

とかなんとか水穂が言ったようにツナは聞こえたらしい。

まあそこは気にしないようにしようとしたらしいが。

「もう痛みも感じねーよ。さっきいきなり感じなくなったし。そっぴゃあお前が触った瞬間からだな…?」

「自分が…触ってからですか?」

「あー…そーだな」

……。

今の会話を聞いていれば…多分誰でも気になるモノが生まれるだろう。

「…触っていいですか?」

「若干気になるよな」

「ですよね…。では…痛かったらゴメンナサイ」

恐る恐るツナの傷口に触れる。

今度は軽くではなく、しっかりと手のひらで。

ヒュオオオオ……。

独特な音が鳴る。

水穂の手が、少しだけ光った。

髪と同じ水色に。

「えっ…コレって…？」

「傷口が…閉じていく…？」

水穂の光った手の触れた傷口は、見る見るうちに閉まっていく。

そして

完全に閉じた。

昔昔あるところに、

傷を癒す心優しい少女がいました。

その娘は誰からも慕われていました。

ですがあるとき。

少女の笑顔は消えました。

皆を守る為に…。

自らソレを選んだのです。

こんな絵本…

消えてしまえっつ！！！！！

破かれたページ。

続きは誰も覚えていない。

続きは誰も……。

第14章 何か不思議な能力が、自分にはあるようです。(後書き)

ここまで読んでくださりありがとうございます！

本当はもっと後書きを書きたいのですが…。

寝る時間が塞まっています…。

本当にここまで読んで下さりありがとうございます  
ではまた後日…。

おやすみなさいませ



第15章 力はコントロールできないとマズイみたいです。(前書き)

黒ツナさん疲れたゝ、(´・`・´)ノ  
ごめんなさい渚です。

でも事実疲れたんですよw  
だからツナさんには倒れてもらいましたw  
熱中症：ってことで(笑)

まああんまし気にせず読んで言ってくれさると…。  
嬉しいなっ キモ

それと、お気に入り登録してくださった方。  
評価してくださった方。  
ありがとうございます  
渚は目から雨が降っています( ジュビアかつ!!

すみません。  
では下にスクロール…お願い致します…;

第15章 力はコントロールできないとマズイみたいです。

【三人称Side】

「……ありえねエ」

「……同感です」

傷が目の前で治った。

しかも、光る手が触れた所が、猛スピードで。

辺りが水色の暖かい光に包まれ、その光に当たった植物が大きく育つ。

小さな種のようなモノが、気づいたら花に。

まるで植物の成長のビデオを、早送りで見ているような気分だ。

「…綱吉様……」

「なんだ？」

「他に傷ありますか？」

「何治すことに優越感を感じてるんだよっ！？」

鋭くツツコミをするツナ。

2人とも見るところが違わずじゃない？

…と思ったあなた。

正しいです。

「…にしても…。お前光引っ込めろよ」

「へっ？」

「いい加減に眩しいだろ？」

「あ…ああ…。でも、引っ込め方分かりませんよ…；； 永遠放出で

す  
」

「はあっ！？　じゃあお前この先光っぱなしかよ！？」

「さあ？　でもこの世に永遠は無いって言うし…。この力も有限なんじゃないですか？」

「そしたらお前が草原歩いたらそこ森になっちゃうだろ！？　…っつーか……。なんかボーツ…、とする…」

「どうしてですか？」

若干悩む水穂。

だがツナは思い当たる節があった。

「あつ。アレだよ…。お前の光…超高温だから…。」

「ふえ？」

「よーするに、近くに太陽がある気分だっつーの。熱中症…だろ？」

「ねっちゅーしょー？」

「なっ！？　まさかお前熱中症知らないのかよ…。ったく…」

呆れたようにキャラメル色の髪を掻くツナ。

なんと言つか、もう怒る気にもなれない。

言葉が出ないツナだが。

問題はそこでは無い。

「…っ…、思ったより…。重症…？」

「にやっ…？ 綱吉様？」

歪む視界。

ふらつく頭。

力が入らない。

これは、まさか…。

ツナの予想は当たってしまった。

ドクンッ…ドクンッ…。

ドクン！！！

「……ぐっ……」

ドサリ。

「 綱吉様！！！！？」

ツナは倒れた。

生い茂った茂みに。

水穂は焦った。

倒れこんだツナを見て。

「綱吉様…、綱吉様…？」

大きな水色の瞳が、左右に揺れる。

そして右手をスーツに乗せ、ゆっくりと揺さぶる。

「ちよっ…綱吉様？ どうしたんですか？ ちよっと…、綱吉様…？」

キヤラメル色の髪が、草と絡み合う。

それでもツナの瞳は開かない。

琥珀色の瞳に覆いかぶさるまぶた。

それはピクリとも動かない。

「ツッ……綱吉ッ……綱よ……ツッ……綱……吉ッ……」

上手く呂律が回らない。

水穂の額に焦りの色が浮かぶ。

腹から搾り出すように声を出す。

「綱吉様つゝ綱吉様つゝ」

やっとでた声は、少しずつ大きくなる。

「綱吉様……！ 綱吉様……！」

涙が溢れる。

出てきた声は、悲鳴となり大地へ響く。

「つつ…綱吉様アアアア!!!!!!」



どんどん強くなる光。

ヘナヘナと力が抜け、茂みに座り込む。

天に向け声を張り上げる。

虚ろな瞳で絶叫する。

留めなく溢れる涙は、頬を伝い地面へと落ちてゆく。

水穂を光源とした体中の光は、庭中に伝わる。

そして水穂の咆哮は、アジト中に伝わる。

「…っ、ハア…ハア…」

ツナの汗が、茂みに落ちた。



第15章 力はコントロールできないとマズイみたいです。（後書き）

ツナ

「…ちよいと待てえ!!」

水穂

「どーしたのですか綱吉様？」

ツナ

「なんで熱中症で倒れただけで死んだ並みに叫ばれてんだよ!？」

水穂

「まーまー、仕方ないじゃないですか。コレ作ってるのって人類最低の知能の持ち主ですよ?」

ツナ

「んー…、確かにな。ならいいや。オレもそろそろ白くなれるっぽいし」

水穂

「そーなんですか!？」

ツナ

「作者も黒いの苦手らしいしな。まあそれでも出すらしいが」

水穂

「ナニその矛盾っ!？ やっぱアホなんですね!？」

ツナ

「まあ今に始まったことじゃない。気にするな」

水穂

「…そうですね。では最後に…」

ツナ・水穂

「「ここまで読んで下さりありがとうございました！ 次回もよろしくお願い致します！…」」

ツナ

「次回も期待せずに見るよ？ それと、この後書きは作者気まぐれらしいから、続くかどうか分からないらしいぞ？」

水穂

「最低の作者ですね では皆様、アリヴェデルチっ^^」

骸

「呼びましたか!？」

ツナ・水穂

「「呼んでねエ!!」」

番外編 祝1000ユニーク突破記念 前編（前書き）

久々に小説情報みたら…。

1000ユニーク超えてました（。　。　）ノワッショイ×2（。　。　）

。）

これも皆様の『暖かい目（ドラえもんかつー！）』のおかげです^^  
こんな駄作ですが、これからよろしくおねがいします

それと…今回は無駄にカッコが多いので、カッコ前にキャラの名前  
書きました

そうそう、それとこの番外編は、1年後という設定になっておりま  
す…；；

あくまで番外編です！！ 渚の妄想です！！

では、本編…？どーぞ

番外編 祝1000ユニーク突破記念 前編

【三人称Side】

水穂

「1000ユニーク!!」

ツナ

「とっば記念!! ってことで…」

ツナ・水穂

「っつい10日前の骸の誕生日を祝おうの会ー!!」  
「」

みんな

「いえーい」

骸

「……へっ？」

ツナ

「なんだよ、その微妙そうな顔」

水穂

「そうですよ六道様。せっかく綱吉様と皆様が祝ってくれると言っているに……」

獄寺

「……まあオレはこんなめんどくせーこと、したくねーけどな」

山本

「はははっ！　いーじゃねーか！　面白そーだし！」

骸

「……めんどくせーこと……、ですか？　何か出し物でも？」

ツナ

「ん……。出し物ではないけど……。まあくわしくはオレも知らないよ。……リボーンが全部考えたから……」

水穂

「綱吉様。顔が若干曇っています」

ツナ

「…だって、リボンが考えてことで感謝したことなんて、1回も無かったから…」

水穂

「……へえー………」

ツナ

「あつ…始まるよ?」

水穂

「ふえ?」

ピンポンパンポン…。

骸

「アナウンス…? ボンゴレってこんなのもついてるんですね?」

ツナ

「オレが付けたんじゃないんだけどね…。知らぬ間に付いてたよ…」

「

水穂

（ボスの知らないところで色々されてるマフィアって…どーなんだろう?）



ツナ

「あつ…。みんな静かに！ アナウンスが始まるよ！」

リボーン

『ちゃおっス！ 聞こえてるか？』

ツナ

「リボーン…第一声が？ちゃおっス？かよ…」

水穂

「…はは…」

リボーン

『今回の楽しい誕生日＆1000ユニークとつば記念のゲームは…』

ツナ

（…なんだろう？ 嫌な予感がする…）

リボーン

『？ボンゴレ内のお姫様を追いかける みんなで楽しくかくれんぼ？…だゾ』

ツナ

「なんか変な題名付けてる ……！…！？」

雲雀

「お姫様…？ 誰のことだい？ それは？」

獄寺

「そりゃあやつぱり、水穂じゃねーの？ 唯一女だし…」

山本

「オレも同感だな」

水穂

「えっ…自分ですかっ…？」

骸

「不満なのですか？」

水穂

「いつ、いえ…不満ではないのですが…。その…自分よりも…綱吉様のほうが…お姫様似合うと…」

ツナ

「…はあ！？ オレ！？」

水穂

「だって…綱吉様見た目いいし…。なんと言っても黒いを見た後に白いのを見ると…可愛いとしか思えないんですよ……」

ツナ

(……………)

リボーン

『まあ簡単に言えば隠れオニだな、ちなみに逃げるのは水穂だ。んでもって、水穂を捕まえた奴には…いいことがあるゾ』

ツナ

「いいこと！？」

水穂

「自分が何かやらされるのですか…?」

リボン

『さあな』

水穂

（さあなって…）

ツナ

「じゃあとにかく水穂を探し出してタッチすればいいんだね？」

リボン

『ああ。開始時刻はA M 10:30だ。5分後だな。時間は無制限だ。誰かが水穂を捕まえた時点で終了だぞ』

水穂

「それってどっちみち自分は何かしらやらされるってことですかー  
！！？」

リボン

『じゃあ水穂。せいぜい頑張るんだな、ちゃおちゃお』

ブツッ。

ツナ

「じゃあ水穂…頑張ってね。命令だよ」

水穂

「…了解しました。では行ってきます」

水穂 は 全力疾走 で 逃げた。

ピッ…ピッ…ピッ…。

水穂  
「っ  
っ  
…ハ  
ア…  
ハ  
ア…  
ハ  
ア…  
」

GAME  
START  
AM  
10:30

走り続けて早5分。

早く、速く逃げなければ。

水穂の決心は固かった。

水穂

「…何か…いい、ところっ…は…  
…!!」

ソレが視界に入った途端。

水穂は神を崇めたという。

ツナ

「さて…。どうするか…」

獄寺

「とりあえず見つけ出さないとイケませんね…」

山本

「小僧も考えたよな　だってコレ、骸へのプレゼントだろ？」

ツナ

「……えっ？」

山本

「骸、水穂を気に入ってるみたいしな！　誰よりも早く水穂見つけ出して、何かやらせるんじゃないかね？」

ツナ

「……！！」

獄寺

「確かに…」

ツナ

「だったら早く見つけないとヤバイじゃん！！　…オレがハイパーモードになったら、超高速で見つけられる…かな？」

山本

「じゃあ頼むぜツナ！」

ツナ

「分かった…じゃあ手袋をとっ」

雲雀

「待ちなよ」

ツナ

「えっ？」

雲雀

「僕にいい考えがある。沢田綱吉、君の力を使いたいいい考えがね」

ツナ

「めずらしいですね……ヒバリさんが提案してくるなんて……」

雲雀

「僕も水穂が変態南国果実の毒牙になるのは嬉しくないからね。今回は特別だよ」

ツナ

「……はあ……」

雲雀

「じゃあ作戦を言っよ。それは」

ツナ・獄寺・山本

「……!!?」



ツナ

「んなっ！？ でも…水穂を助けるためなら…仕方ない…のかなあ…」

獄寺

「雲雀にしては…いい考えじゃねーか」

山本

「なのな〜」

雲雀

「じゃあ行くよ」

獄寺・山本

「おう！〜」

ツナ

「……………」

水穂

「ここなら誰にも見つからない」

1人喜ぶ水穂。

この考えが覆されることになるのは、もう少し後のことだったりする。

番外編 祝1000ユニーク突破記念 前編（後書き）

まさかの前編！？

さてさて、雲雀（様）の作戦とは何なのでしょう？

何なのですか？（きくな

まだ自分も決めてませ<sup>n</sup>（ゴホンゴホン

あっ、いや！

これから頑張りたいです！

1000ユニークが突破できたのも、皆様のおかげです^^

本当にありがとうございますます

では、アリヴェデルチ

骸

「呼びましたかつ！！？」

呼んでねえよ！！

つーか2度目（人によっては3度目）は寒みいよ！！

番外編 祝1000ユニーク突破記念 中編（前書き）

こんにちはo rこんばんは  
渚です^^

最近テストやらなんやらかぶさって…。

小説がかけず、すみません…。

次のテストで10位以内に入れば、LAIR GAMEのDVD  
ボックスを買ってあげるよ…。と、悪魔のささやきを耳元で言われ  
ています…。

だから…その…中々更新ができなくなってしまいます…。  
すみませんっ!!

どーでもいい前書きとなりました!!  
では、本編どーぞ

【三人称Side】

水穂

「ふう……。やっと息が整ったと言うか……。落ち着いたなあ……。；；；  
来ない……。来ないよねっ。うん、大丈夫だよ自分……。だつて……」

必死に自分に語りかけ、落ち着かせている水穂。

言葉とは裏腹に、どこか落ち着きの表情を見せている彼女が隠れ

た場所。

そこは

水穂

「女子トイレに…男が入ってきたら…気持ち悪いもん」

先ほど水穂が見つけた隠れ家。

それは女子トイレだった。

記憶を失っているとは言え、彼女は賢いほうだ。

強く逃げたいと思ったため、頭が働いたのだろう。

水穂

「ここが見つかって…よかったな…」

洋式のトイレのフタに座り、呟く水穂。

水穂

「でも…六道様なら、入って来そう」

ガチャリ。

水穂

「　　っ！！！？」

人の、入る音。

ドアが、開く音。

水穂

（…誰……？）

カッン、カッン…。

水穂

（ヒールの…音？　じゃあ…女性？）

ピタリ。

水穂

「　　つつっ！！！」

ドアの前で…足音が…。

水穂

（止まった…？）



…・…少し前…・…

ツナ

「オっ…オレが女装…？　なんで…」

雲雀

「恐らく、水穂は女子トイレに隠れているよ」

ツナ

「なんで、そんなこと言えるんです？」

雲雀

「……」

ツナの発言に同意するように頷く獄寺と山本も含め、雲雀はじりりと3人を見ると、

雲雀

「君達、バカ？」

ツナ

「んなっつ！！？」

獄寺

「デメツ!!」

山本

「ハハハッ」

溜め息を吐いた雲雀が言った。

雲雀

「いい？ 沢田綱吉。君がもし水穂の立場だったら、どうする？」

ツナ

「オレが…水穂の立場だったら…？」

雲雀

「僕なら、君達が来れない場所に行こうとするね」

ツナ

「そっか…なら、屋上とか？」

雲雀

「……」

少しダメツナの面影を残すツナの発言に驚きつつ呆れながら、雲雀は言う。

雲雀

「…君、アホ？」

ツナ

「んなぁあつつ!!!？」

獄寺

「雲雀！！　いい加減にしろ！！」

雲雀

「…もついいや。僕が疲れるから完結に説明するよ。つまり、水穂は僕達が来ないであろう場所　女子トイレに居る確立が高い」

ツナ

「…！　そつか！　確かに水穂ならそーするカモ！」

持ち前の超直感は何処に言っただのやら。

雲雀の発言にテンションが上がるツナ。

雲雀

「だからこそ、君が女の格好をするんだ」

ツナ

「……はあ……」

そこには、納得できない。

そう言いたげに曖昧な返事をしたツナは、続けてこう言う。

ツナ

「じゃあ…雲雀サンが女装すれば…」

雲雀

「君、脳の検査受けなよ」

ツナ

「んなあああああ！！！！！！！！！！」

獄寺

「テメエエエエエ！！！！！！！！！！」

本日3度目の雲雀からのダメ出しに流石のツナでもダメージを受ける。

まあそこは気にしないように努力したのか、話を戻したツナは、

ツナ

「と…とにかく…どーゆーことですか？」

雲雀

「……つまり……」

雲雀の作戦は、つまりこういうことだった。

まず女性の格好をしたツナが、水穂が女子トイレに居るかを確認する。

ツナはわざわざ女装をしなくてもいいと思ったが、恐らく骸は不自然なところに必ず来ると判断した雲雀の言葉により、ツナは泣く泣く女装をOKした。

そして、水穂と会話する。

このとき「自分はボンゴレアジトに代々仕えるメイド」と言う。水穂と会話をしている最中、それとなく「どうして、こんなとこ

ろに居るのです?」と聞く。

そこで水穂から隠れオニをしているからだ。と聞き出す。

ここが勝負所だ。

微妙な間を置き、「では、私の知っている隠れ家…おそらくご主人様でも知らない隠れ家にこれからいらっしゃいますか?」と聞くのだ。

そして水穂は同意し、女子トイレから出ようとする。

ここでパツ、と水穂の手を取り「捕まえた」と言えば完了。

……とまあこんな感じだ。

ツナ

「只今の説明の間、みかんと忠犬とバッド君にメイド服にさせられ、女子トイレ前におかれました」

ドンマイ。

ツナ

「ウルサイ作者」

ごめん。

ツナ

「素直だな……」

と、ここでさっきのシーンに戻る。

水穂

「だっ…誰…です、か？」

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。とツナは思う。

怯えている水穂がどうか、そもそもこれは骸の誕生日企画ではなかったのかとか、もうそんなことどーでもいい。

鏡に映る自分が、可愛すぎて恥ずかしい。

どこから持ってきたのか、髪とまったく同じ色のエクステを付けたツナは、今やロングヘアのよく似合う、普通の美女であった。

恥ずかしい。恥ずかしい。

そんな気持ちしか浮かばないツナであったが、水穂のためだと思ふと頑張れた。

と、言うか。頑張るしかない。

ツナ

「……………私は、ボンゴレに仕えるメイドでございます（裏声）」

台本通りの言葉で、水穂を騙しにかかるツナ。

水穂

「メイド…？　じゃあ、女の子…ですか？」

ツナ

「ええ。私の名前はミルカット・ハバリアナ・メリアーヌ・ライラです。貴女は？」

水穂

「（名前長っ！…？　あ、外人さんかな…？）自分は…水穂。香川水穂です」

ツナ

「水穂…。いい名前ですね？　私のことはミルカットでいいですよ」

水穂

「じゃあ…自分も水穂で…。あつ、待っててください。今出ます」

ツナ

「えっ、ええ…」

水穂は言葉のとおり慌ててドアを開け、おせおせと出てきた。

水穂

「よろしくです、ミルカットさん」

ツナ

「よろしくお願い致しますね。水穂様」



リボン

「…ニッ。台本どーりだな」

小さな懐中電灯に照らされた台本。

そこには、

ツナ：よろしく願いしますね？

水穂：よ…よろしくです。ミルカットさん。

と書いてあった。

少し差はあるものの、大半は間違っではない。

リボンは、何を思いこんなことを企画したのか？

謎が多いこのゲーム。

行き着く先は、どーなるのやら？

未来は…。

神のみぞ知っています。

番外編 祝1000ユニット突破記念 中編（後書き）

アワワワワ！！

ツナ君が女装！？

ちなみに、スカートです……

変態化してきました……

ツつくん……可愛いな（・・・） アホ

超ツナ

「……キモチワルイ作者ですまない」

ふおっ！！

はいぱあつな

超ツナ

「……？ BURNAR……」

ぎゃああああ……！！

超ツナ

「……と言つことで、次回も見てくれることを願う。……いい夢が見れるといいな。……じゃあ、また次回にでも……」

番外編 祝1000ユニーク突破記念 後編（前書き）

こんにちは orこんばんは

そういえば…物凄くお伝えし忘れていたことがあります…；；；

この番外編の時間軸は？一年後？なんです…！！

お伝えしてなくてすみません …；；

そしてもう1つ。

長らくの更新STOPまことに申し訳ございません…！！！！

PC使用時間が限られていまして、しばらくの時間分を繰り上げて、今日やっと沢山の時間PCが出来ることになったので、慌てて小説を書いてる渚です…！！

自己中心的な渚を、どうかお許しください…。

前置き長くなりました。

では、本編です どーぞ

ツナ

「よろしくお願いいたします、水穂さん」

水穂

「よろしくです…。ミルカットさん」

女装した（一応）男であるツナと、純粹な女の子の水穂。

そんな2人が居るのは世間一般に言う？じょしといね？と言うモノであつた。

女装してしまえばツナが居ることに何も違和感が無いとか、そもそも至近距離で見ても気づかない水穂も色々凄いや、そんなことは本当にどーでもいいことになっているこの状況。

ツナは似合ってしまったっている自分に怯え、水穂はいずれ見つかってしまうであろうと言う恐怖に駆り立てられていた。

動けねエ!!!

何と言つか、空気が重過ぎる。ここで言葉を発した場合は？けーわい？まっしぐらだ。

ツナは思う。

だがそこで言葉を発しなければ、水穂が色々心配だ。

仕方がない。

覚悟を決めたツナが口を開いた。

ツナ

「あ…の…その…」

水穂

「？ 何でしょうか？」

ツナ

「あ…の…ドーシテコンナ所ニ、イルノデスカ？」

ツナ・水穂  
（何故にカタコト!!!?）

ツナ  
「.....」

水穂  
「.....」

ツナ

（自分で言う（思う）のもなんかアレだけど、今は本当に摩訶不思議だった！！　　もう台本を読んだとは思えない棒読みだった！！）

水穂

（絶対にミルカットさん今棒読みだった！！　　台本読んだとは思えなかった！！）

ツナ

「……」

水穂

「……」

ツナ



（仕方ない…こうなったら…!!）

水穂

（もうこうするしか…方法はありません…!!）

水穂

「今、オニさんから逃げてるんですよ」

ツナ

「へ…へへ。そーなんですか…それはそれは、大変ですね…。ア、ハハ…」

水穂

「アハハ…」

ツナ

「アハハハ…」

笑ってすごす。

細かいことは追求しない。

それが、中学生の作者が思う大人の付き合い。

ツナ

「で…逃げてる、と言いますと？」

水穂

「あ…それはですね…言つてよろしいのでしょうか…？ 只今この館の主である？ 沢田綱吉？ 様の部下（？）である？ 六道骸？ 様の誕生日企画で、隠れオニをしているんです…」

ツナ

「あゝ、なるほど…。で、捕まると貴女にとってデメリットがあるわけですね？」

そんなことは分かってるけれど、怪しまれないために口裏を上手い感じに合わせるツナ。

ツナの下心にまったく気づかない様子の水穂。

水穂

「そうなんです…。あの腹黒サイヤ人が怖くて…」

ツナ

（　　おっ？）

ツナの仮面にヒビが入る。が、引きつった顔は笑顔で隠された。

水穂

「なんか禁句ワードを言ったら性格変わるとか…。確かに普段はホワイトで可愛いですけど…。ブラックになったらもう手が付けられませんよ…」

ツナ

「へえ…」

水穂

「あれじゃあカメハ　ハだって通用しませんわ。無重力ヘアーも凄いですしねw」

ツナ

「ほほお…」

ツナのニキビ一つ無い綺麗な肌が、わざとらしく上に持っていける。

辛うじて眉間にシワは寄らないものの、耐えられないと言った様子で手は震えていた。



「……」

水穂

「だけど、危険を冒して窓から飛び降りた自分をキャッチしてくれたり、そもそも一年前まったく見ず知らずの自分を拾ってくれたのも、ボスである綱吉様です」

上を向いて水穂は呟いた。天井を見る訳でもない。何にもピントを合わせることなく、言葉を発する。

水穂

「なんだか…分からないんです。今も記憶喪失をしている自分ですけど…分かるんです」

ツナ

「何が…？」

水穂

「綱吉様が主人公で、それを取り巻く世界が1つの？物語？だったとしたら……。きっと自分は？イレギュラー？。つまり、？居てはならない人物？のような気がしてならないんです」

悲しげな瞳で見る水穂に対して、もうミルカットと言う仮面は脱ぎ捨ててしまっているツナは、否定せず。にはいられなかった。

ツナ

「そんなこと……。つ。そんなことありませんよ……」

ツナ

（水穂に逢えてよかった。オレは水穂に逢えて、本当に　　）

水穂

「もついいですよ、？綱吉様？…」

えっ？

水穂、今オレのこと。

ツナ

「綱吉って、呼んだよね…」

啞然とするツナを見た水穂は、クスリと笑って言う。

水穂

「見た目じゃ分かりませんが……人類には？聴覚？と言うモノがあるんですよ」

ツナ

「……あ…そうだったな…。忘れてたよ、ハハッ…」

水穂の笑顔に目線を逸らすツナは、まるでどこかの名探偵の宿敵の白いハンググライダーのお宝マニアのようにメイド服を脱ぎ捨て

た。

ツナ

「それにしても…。オレって分かった上であんなこと言っ…どーゆーこと？」

水穂

「そつ、それは…；；怒りませんか？」

ツナ

「多分」

多分かよっつ！！！

そう思ったもののソレを押さえた水穂は、ツナに言った。

水穂

「実は…。全部自分の作ったストーリーだったんですよ」

ツナ

「ストーリー？」

水穂

「Si！自分に好意を持っているとお伝えて下さったのに、最近綱吉様が冷たいから…。無礼ながら試させてもらいました」

黒い笑みを浮かべる水穂は、今だに状況が整理できていないツナの目の前で指を鳴らした。

すると。

リボン

「お前の演技力も上がったな、水穂」

ツナ

「なっ!？」

屋根からリボン登場。

水穂

「ありがとうございます」

雲雀

「僕に命令なんてどういうこと？　ちゃんと借りは返してよね」

水穂

「ご安心を。綱吉様が最高級の和服でも仕入れて下さるはずですわ」

ツナ

「なんでオレなんだよ!？」

獄寺

「まったく…10代目を騙すなんてよお…」

山本

「オレは結構楽しかったけどな　　ハハッ!」

水穂



「感謝しています。貴方達にも綱吉様から何かあるはずですよ」

骸

「僕の誕生日はどうしたんですか…。ハア…」

水穂

「大丈夫ですよ。骸様にはちゃんと自分からプレゼント買っておきました」

骸

「えっ!?!」

水穂

「どうぞ… パイナップルの缶詰100年分です」

骸

「クッハアアア!!!!?!」

水穂

「ちなみに経費は綱吉様です」

ツナ

「だからなんでだよ?!?!? ツーか…じゃあオレはまんまと策にハマってた訳か…」

水穂

「でも、綱吉様は? いい方? の台本に動いてくださいました 自分の予想ではメイド服なんか着てくれないと思いましたw」

ツナ

「……そんなにオレのこと疑ってたのか？」

水穂

「相手してくれないのが悪いんです。でも　やっぱり綱吉様は綱吉様でした！　嬉しいですわ」

ツナ

「……？　そー、なのか？」

水穂

「Si　綱吉様はお仕事頑張ってください　猫は家で待っていますわ」

リボーン

「猫は家に懐くって言っしな」

ツナ

「んなっ！？　酷いぞリボーン！？　つかオレ、ボスだぞ！？　お前口慎めよ！？」

１年で、背大きくなっ たな…。

前はちよつと見上げれば目があつたのに。今はこっちが見上げて、ツナが見下ろさないと目が合わない。

水穂は微笑み、そして　。

水穂

「……綱吉様」

ツナ  
「んっ？」

クイツ。

リボーン  
「お」

雲雀  
「!!!!!!!!!!？」

獄寺  
「おいっ!!!!!!!!!!」

山本  
「……………」

骸  
「!!!!!!!!!!!!!!!!!!？」

ツナ

「っ！！」

水穂

「綱吉様。自分は腹黒くても構いませんし、ドSでも結構です！  
自分が好きなのは、今のままの綱吉様です」

ツナ

「っ……／／／／／」

水穂

「自分が望んでいるのは 非日常ですから」

ツナ

「水穂……／／／／／」

リボン

「イチャイチャしゃがって。敵つくっぞ？ ツナ」

ツナ

「へ……？」

雲雀

「……沢田綱吉。1回死になよ」

ツナ

「んなあああ!!?」

骸

「堕ちろ。そして廻れ」

水穂

「頑張つて下さい綱吉様！ 自分は何も知りませんw」

ツナ

「おい!? 水穂…っ?」

水穂は窓のサッシに足を乗せ…。

水穂

「今度もキャッチしてくださいね、綱吉様」

飛び降りた。

ここは5階。

ツナ

「おい待て!! 水穂!!」

リボーン

「ヒバリのスピードも、骸のスピードも…大したモンだな」

気づくともうみんなの姿は無く。

ツナ

「こんちくしょー!!!!」

体に風が当たる。と同時に、感じたのは浮遊感。

水穂

「今度は落ちないんだから」

心地いい。それでいて、下で戦っている皆を見ると、何だか幸せになって。

水穂

「まだまだ？ 非？ 日常はこれからだわ」

両手を必死に広げるツナの元に、自分は落ちていった。

これが…きつと自分の望んでいた非日常…なのかも知れない。

ツナ

「水穂、危ないだろ!!」

水穂

「……？ 綱吉？ は、自分がこの程度で死ぬと思ってたのかしら？」

ツナ

「思ってないけど…。怪我とかしたら、危ないし…」

水穂

「もう一回、さっきのアレする？」

ツナ

「バツ…!! もーいっつーの…!!」

楽しい。それで幸せ。

水穂

「ツナ、よろしくね…!!」

微笑んだ自分に、優しく微笑み返してくれる綱吉。

これからも自分は綱吉と歩いていくと思う。

それこそが自分の非日常。これからも非日常探しに頑張るわ

だって、

非日常には、幸せが潜んでいるんだから

番外編

{  
E  
N  
D  
}



番外編 祝1000ユニット突破記念 後編（後書き）

わけがわかりませんねw

まあつまり：1年後、こうなっていたらいいな。という渚の妄想です（笑）

でも、パラレルワールドって思ってたほぅが嬉しいですw

ほら、設定が変わったり設定が変わったり設定が変わったり設定が変わったり設定が変わったりe t c . . .

ということが渚の小説では超日常茶飯事じゃないですかw

ですから、これはあくまで？番外編？として捉えていただければ。

ウレシイナツ （キモ

ということ、ここまで読んで下さり、まことにアリガトウゴザイマス！

次回も遅くなってしまうかも知れませんが。

シーユー、アッゲインです！

第16章 熱中症の意味を教えてください。（前書き）

お久しぶりですっ（、´、`）  
渚です。覚えていらっしゃると思いますでしょうか？

...

.....

スクロールっお願いしますっ（逃げた

## 第16章 熱中症の意味を教えてくださいました。

【三人称 side】

「綱吉様ア…綱吉、様…」

「どうしました…!!?」

水穂の声を聞いて、真っ先にかけて来たのは骸だった。

涙でグシャグシャになった顔で、骸のほつを向く水穂は…やはり光っていた。

「……どうしたんですか、水h　!？」

冷静にろうとした骸の視界に入っただのは、倒れている我がボス。

つくづく、ここに獄寺が居なくてよかったと骸は思う。  
居たら、真っ先に水穂を殺<sup>や</sup>っていただろうから。

「骸様…綱吉、様をつ…ヒック…助けて、下さい…」

「言われなくてもわかってますよ!!」

骸は三叉の槍(?)をだして、幻覚で一氣にツナを覆った。

そして水穂に近づかないように近くに連れてきたのだ。……理由  
は、1つだった。

倒れていた理由に水穂が関与している可能性があったから。

演技かもしれない。信じたくはないが、捨てきれない。

「幻覚とは、便利なものですね…」

そう呟いた骸は、水穂を置いて消えた。

「自分のせいだよ…自分の…」

水穂は目を閉じて、強く?願った?。

すると　……

「あれ……？」

光が、キエタ。

「ねっちゅーしょー？」

「そう。熱中症」

……とまあ先ほどの10分ほどの話。

今は光が消えた水穂を雲雀が保護し、部屋にいる状態だ。

冷静に水穂に状況を喋らせた雲雀は……。なんと言うか、呆れた様子だった。

まあ、高校生にもなって熱中症を知らない水穂も水穂だが。

「君の光は、超高温とか言ってたんでしょ？　じゃあ熱中症以外ないだろうね」

「と……言つと……？」

「……………真夏の砂漠に服着たまま放り込まれたら、水穂だって倒れるに決まってるじゃないか」

雲雀は冷たい目で水穂を見つめ、言い放つ。

「よつするに草食動物が倒れたのは、君のせいってこと」

「……………!!!?」

水色の瞳が丸くなる。

そして目尻に涙が盛り上がる。

だが、あくまで雲雀は冷たい眼差しで水穂を見据えていた。

雲雀にとって？ 沢田綱吉？ とは大事なファミリーでありボスなのだから。

例え普段冷たく、関わらなかったとしても。

それはちゃんと？ 雲の守護者？ として役割を果たしている。

……だから、水穂の行動は守護者に対して喧嘩をふっかけているようなモノなのだ。

どんな形であれど、6人はツナを大事に思っているのだから。

「君がどう言う反応をしようと知らないけどさ……」

「君がしたことは、君が思っている以上に重い罪だから」



「……はい」

水穂は俯いたまま、敬語で返事をした。

そして立ち上がると ……

「失礼します。雲雀、様」

部屋を出て、走り出した。

「ん…？ オレ…」

「まだ起きるな。ダメツナが」

ツナが目を覚ました場所は、ソファの上。

そして隣に居たのがリボンだった。

「オレ…何を…？」

（白ツナに戻ったな…）

「庭で倒れてるところを、骸が発見して運んできたんだ。熱があったみてーだが、体調はどうだ？」

さすがは凄腕のヒットマンと言ったところか。

黒ツナの記憶が無いツナに対し、表情を変えずに適当なことを言った。

ツナはまったく疑う様子もなく返事をする。

「うん…あんまりよくないかな？」

「（熱中症はもう治ってるはずだよな…？）そうか。ならもっかい熱計つとけ」

「わかった」

リボーンは思う。

何故、ツナの体調がよくなっていないのか、と。

自分の対処が違ったか？

いいや…完璧だっただろう。

なら、何故…。

「……!!」

そうだ。ツナには？力？があつたのだ。

ブラッド・オブ・ボンゴレ  
……

超直感が。

「リボーン……思いのほか熱あるよ……。どーしたんだろう、オレ？」

「……」

「リボーン？」

「！ 悪い、何度だ？」

「うん……37.8……」

そのとき、リボーンは気づいた。

「アイツだ…ツナ」

「え？」

「アイツが来るぞ」

「アイツ…？」

「！！！！ アイツって…まさか…」

彼女は、木の上に座り美しい歌声を奏でていた。

『……………香川水穂……………』

美しい歌声は、次第に狂おしい不協和音の様な音へと変わる。  
『ちよつと可愛いからって…わたくし私の綱吉に手を出すなんて…』

植物が、枯れる。

命を、枯らす。

『許さない……許しませんわ……!!!!』

「アイツ……美奈夜が……来たってこと……?」

『殺してやる!! 殺してやるわ!! あははははは!!!!!!』

## 第16章 熱中症の意味を教えてください。（後書き）

ツナの体温で名前あらわしてたとか気にしてはいけません  
もう当初の目的まるで関係無いとか気にしてはいけません

ハイ。新キャラ登場しました。プロフィールは下記詳細です。  
見なくても十二分に理解できるキャラなので、

「へーコイツ病んでんや」ぐらいの解釈で構いませんので（笑）

でわ、プロフィールです

すすかわ みなや  
【鈴川美奈夜】

ツナ、水穂と同じ年。

髪は漆黒です。目は黄色です。  
さすが夜！

ネタバレ含むので詳細は書けませんが、とにかく被害妄想激しい  
です。

そして嫉妬深いです。

歌によって命を奪うことができます。

……ね？

ホントにどーでもいいことしか書いて無いんですよw



ま、嫉妬深くて面倒なキャラって思ってたされば嬉しいですw

それでは、ここまで読んで下さりありがとうございましたっ！

アリヴェデルチですっ



第17章 どこにでもウザったいのっているまんですね。

【三人称Side】

「面倒なことになったな……」

「…どうしよう、リボン……」

2人は眉間にシワを寄せ、なんと言うか……分かりやすく嫌な顔をしていた。

その原因は…。

「美奈夜が、来たなんて…」

美奈夜。

本名？すすかわ みなや 鈴川美奈夜？。

お世辞にも大きいとは言えないファミリーのボスで、代々受け継ぐ能力を持つ。

漆黒の髪に黄色の目を持つ、ツナと同年の女の子。

ちなみに容姿は水穂とまで言わないものの可愛い。

ツナ、守護者、その他色々談

「どうする？ ツナ」

「どうするって言われても…。とりあえず、水穂を守らなきゃ！」

「……？」

ツナの言葉に、リボーンは疑問を持った。

それを素直に口に出してみる。

「ツナ、何でお前水穂のこと知ってた？」

と。

「え……。だって、記憶喪失で…部屋で寝てるじゃん…」

「あ…そうだったな。すまねエ」

そう言えば、黒ツナ化したのは水穂と会話した後だったな。

リボーンは思い出す。

といっても、黒ツナ率のほうが多断然だろうが。

「オレ、今から言ってくる!!」

ツナは近くにあったグレーの上着をはおり、部屋から飛び出した。

「待てツナ!! オレも一緒に行く!! 1人じゃ危険だ!!」

リボーンも走ってツナを追いかける。

そのときだ。

「あなたは、誰ですか？」

「　　！　水穂…」

リボーンの後ろに居たのは、水穂だった。

数メートル前の曲がり角で見つけたのだろう。

「オレはリボーンだ。ツナかてきよーの家庭教師だゾ」

「リボーン…？」

「ああ。悪いが今は緊急事態だ。とりあえずツナに水穂を見つけたと報告を　…」

どこから取り出したのか。リボーンは水穂のもっていた？黒？の携帯を取り出し、開こうとした。

「　　！！！！！！？」

リボーンの手が止まる。

その理由は1つだった。

黒は、周りからの反射を遮り、鏡のようになることがある。

透明な板の後ろに黒い折り紙を当てると、それはまさしく白黒の鏡なのだ。

そして、水穂の携帯も黒。

リボーンは反射で映った後ろの景色を見て、止まったのだった。

「リボン…くん？」

「しっ。黙ってろ、水穂」

小声で水穂に言う。水穂もそれに応じ黙り込む。

沈黙が続く。

そのときだ。

「  
」  
」

美しいメロディが、2人の耳に入った。

透る、声。

「えっ…？」

水穂は振り返った。

すると  
…

「チャオ  
Ciao。水穂ちゃん」

「…こんにちは…」

「チッ…」

振り返った先に居たのは、漆黒の髪に黄色の目をした女の子…。

そう。彼女は？ 鈴川美奈夜？、その人だった。

不適に微笑みかける。

一方水穂は瞳孔を小さくし、その様子に怯えていた。

そのとき。

「水穂！！ 伏せて！！」

「（！？）はい！！」

聞こえてきた声にすばやく反応し、膝をつく。

そして水穂の頭上を通ったのは、死ぬ気の炎を纏った追尾型の弾。ホーミング

炎の色は オレンジ。



「……」

高速で飛んでくる弾を無言で見つめ、動こうとしない美奈夜。

そう、動こうとはしなかった。

「…Ver・物体静止」

一言呟くと、歌を歌い始めたのだ。

「　っ！…！？　何コレ…！！？　動きづらい…っっ！」

「耳を塞ぐんだ水穂！！」

「っく…」

辛うじて耳に人差し指を入れ、音を遮断する。

するとたちまち体は動くようになった。

目を開け、前を見る。　と。

「えっ…！！？」

水穂の視界に入ったのは、空中で固まったままの弾。

そしてその炎が消えると、地面に堕ちた。

「危ないですわよ…綱吉様」

恐る恐る手を離す。

すると、ツナと彼女の会話は驚きの内容だった。

「そろそろ、決めてもいいと思ひまして…参りました」

「うるさい…。早く消えてよ」

「仕方ありませんわよ。もう過去に印鑑を押してしまっている貴方にも、私にも…拒否権はありませんからね」

「うるさい！！ 屋敷から出て行け！！！」

「いいえ出て行きません。さあ、式はいつにしましょうか？ 綱吉」

「黙れ！！ オレはお前を許さない！！ 絶対！！！」

「ですからもう今更あがいても意味ないんですよ。式は…今月でいいですね」

「出て行け!! これはオレの意思で決める!! 印鑑なんか知らない!!!!」

「リボンくん…彼女は…誰? 綱吉様と…どういう関係なの?」

「水穂…」

「どうして、争っているの?」

「……それは…」

「…ところで綱吉、彼女は誰ですの?」

「お前に教える筋合いなんかないだろ!! いいから出て行けよ!!」

「…ふうん。なら…ここで殺しますか?」

「やめろよ!!」

「いいえ、やめません。Ver. 殺害…」

「……！ やめろ美奈夜……！！！」

「………」

「やあっと名前で呼んでくれたあ」

「……っ……！！？」

「リボーンくん……言って……」

「………彼女は……鈴川美奈夜は………」

「ツナの、婚約者なんだ」

「出て行け……!!」

「いやですわ　出て行きません」

「……えっ？」

第17章 どこにでもウザったいのっているもんですね。（後書き）

はい。とまあここまでです！

美奈夜ちゃん

どうしてここまで

病んじやった

川柳、どーですか？（黙れ

ツナがここまで毛嫌いしているのには、ちゃんとした理由があります！

天使のハートを持ったツナ君が一方的に嫌ったりなんかしませんっ

新事実

なんと彼女は

婚約者

川柳、どーですか？（だから黙れ

とにかく、次回から事実明かしていきますので！  
今回はここまでです！

それでは、アリヴェデルチ

第18章 婚約者さんに頭にきました。

【三人称Side】

「え……？ 婚約者……？」

「……そうだ」

瞳孔を小さくし、只々驚くことしかできない水穂。



帽子を深く被り、少しだけ頷いて答えるリボン。

首を大きく振り、婚約と言う事実を否定するツナ。

何を言われても、笑顔のままツナに続ける美奈夜。

ボンゴレ城のとある一角。平和なハズの其処に響くのは、ボスの悲痛の叫び。

「違う!! 違う!! オレはお前なんかと婚約なんか…  
…!!」

「!! 綱吉様!!」

途端に苦しそうに顔を歪め、膝を付いたツナ。

「大丈夫ですか!? 綱吉様!!」

「う…うん…。大丈夫…」

「とりあえずお部屋に…っ…?」

不意に首に微かな痛みが走る。

何なのだろう?

と水穂は思う。

恐る恐る手で其処を触ると、生暖かい赤いモノが手に付いた。

「え…？ 血…？」

「　　っ！！　　美奈夜！！　　お前！！」

「そんな気を抜いていると、簡単に殺されちゃいますわよ

香川水穂さん」

「えっ…！？」

（何で…何で自分の名前を知っているの！！？）

水穂はとっさにツナの後ろに隠れた。

ツナも、水穂の前に出て美奈夜への警戒を高める。

「そんな警戒なさらなくても、大丈夫ですわ。私がもしその方を殺す気があったなら、今頃歌っていますもの」

「お前はオレを殺したくないハズだ…。オレがこんな状態で歌ったら命に関わることでくらい手前だって分かるだろ」

チラ、とツナが見た水穂は傷口を押さえ、震えたままだった。

「流石にボンゴレのボス様ね。そうよ、私が今日ココに来た理由はただ一つ　…」

水穂に視線を移し、睨みつけながら言葉を放つ。

「綱吉に付く悪い虫を、処分しに来たの」

そしてその言葉の後声帯を開き…。

「ver. 殺害」

「!？」

「水穂!!」

「危ねエ!!!」

綱吉様が青い顔をして、自分に向かって覆いかぶさってくる。

リボン君も綱吉様の上に多分乗った。

美しく、だが命を奪う歌声が綱吉様の耳に入る



「何だ…？ この、光…？」

水穂が叫んだときだ。

またあの青い光が放たれた。

そしてその光は水穂達3人を包み込み  
…

「うそ…！！ 私の歌が…聞かない…！！！！？」

美奈夜の歌を、歌の効力を  
…

跳ね返した。

「水穂…傷が…」

「そんなことより……大丈夫でしたか？」

青い光はドーム状になり、美奈夜から3mほど離れた位置まで広がった。

ツナとりボーンはいまだに状況を理解しきれずに、水穂と美奈夜は睨み合っていた。

「ありえない…っ！！　ありえない！！　私の攻撃がきかないなんて…っ！！！！　美奈夜は認めない！！　絶対認めない！！」

「美奈夜様。貴女様の攻撃は、自分にはききません」

「うるさい虫めエ！！！！　綱吉に盾突く虫ケラ！！！！」

「貴女の攻撃は？奪う？モノ。自分の攻撃は？与える？モノ。……意味が分かりますか？」

「うるさいうるさいうるさい！！！！」

美奈夜は先ほどのツナのように頭を大きく振る。

ツナにはソレが、水穂なりの自分への気づかいのように見えた。

自分が信頼している主人を、見ず知らずの者に傷つけられていたとしたら……。

多分、答えは1つだろう。

「……ありがとう。水穂」

「いえ。メイドとしては、当然のことです。それに……」

美奈夜をもう一度睨みつけ、ハッキリと言った。

「能力に恵まれ、我侭放題で生きてきたお姫様を調教できるのも……自分だけのようですし」

「水穂……」

「さあ。どこから調教しましょうか」

「鈴川美奈夜」

自分は此処に誓いましょう。

この能力。いつまで続くか分かりませんが。

自分が綱吉様に出会ったのも、記憶喪失になったのも、能力に目覚めたのも…。

このときの為です。

綱吉様に平穏が訪れたとき、自分は元の自分に戻ります。

それまで…メイドをさせてくださいよ？ 綱吉様。

『それまでで…たったそれだけで…いいのか？』



自分の中で、自分がそう呟いた気がした。

でも、その声に気づきながらも…自分は、耳を塞いだんだ。

だって、自分は部外者<sup>イレギュラー</sup>だから。

## 第18章 婚約者さんに頭にきました。(後書き)

マル・マル・モリ・モリ

ごめんなさい。

ムック君の「じれったいな〜」が面白いなうですw  
阿部サダヲさん演技上手いですね〜(＜＞)ノノ

第二期やってほしいですw

さて、今回はものっそり暗いです。

ものっそり笑い無いです。

まあ普段からものっそり笑いないですけど。

ここまで読んで下さりありがとうございました

マルモ大好きな、パステルでした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4720t/>

---

非日常は...、好きですか？

2011年11月12日14時08分発行